



# 解体心書



文風 冴月

---

——人間に必要なものは、血と肉と、一握りの恐怖である。

## 手首（0）

---

### リストカット - シンドローム

《(和)*wrist+cut+syndrome*》手首の内側をカッターなどの刃物で切る自傷行為が習慣化していること。主に10代から20代の若年層、特に未婚の女性に多く見られる。手首自傷症候群。

## 手首（1）

---

綺麗な手首だな、と初めて彼女の手首を見た時から思っていた。白くて細い、華奢な手首。私の小さな手でも、ぐると掴めそうな細さだ。

傷ひとつない薄い皮の下を、淡青色に霞む幾筋の血管が、葉脈のように走っているのがうっすら見える。

ひどく綺麗だ。

それに比べて、自分の手首はとても醜い。比べることすらおこがましい。

私は左手首にいつもリストバンドを着けている。白いラインが三本入った飾り気のないもので、その下には傷痕がある。何重にも描かれた、リストカットの痕。皮膚はかさぶたになって凹凸が激しい、私の左手首。右手の人差し指でそっとそこをなぞると、凹凸が五線譜に思える。どんな音も立てることはないけれど。

彼女のそれとは決定的に、徹底的に、絶対的に違う。

私は醜い。

だから、倉木小夜子先輩に話しかけられた時は嬉しかった。

それ以来、先輩と仲良くなったのだけれど、私はいつも彼女の手首のことばかりを考えていた。先輩の手首に刃を押し当てたら、どんな具合に血が噴き出すのだろうか。そんなことばかりが頭の中を回っていた。

本当に、私は醜い。

本当に。

「へえ、バンダーを読むのね」

図書室で『私の見えない徴』を読んでいた私に話しかけてきたのが、倉木先輩だった。

肌は北極の雪を溶かして染め上げたような完璧な白。その上、宇宙の深遠の如き黒髪は背中に長く垂れ、彼女が歩くあとを追うように靡くのだ。図書委員会の部長を務めていて、人望もある。異性からの人気も高い。

夏服の半袖のブラウスから伸びた白い腕。そこについている綺麗な手。手首はとりわけ華奢で美しく、ついまじまじと見てしまう。

「先輩もバンダーを？」

おずおずと質問をすると、先輩は白百合のように笑った。

「嫌いではないわ」

澄んだ声が心地良い。何を食べて育ったらこんな声が出るのだろうか。

それは初夏の夕暮れのこと。その日以来、私は図書室に足を運ぶのが日課になった。図書委員の当番の日でなくても、先輩に逢う為に図書室に通った。

受験勉強をするのに静かなところ、ということで、先輩は毎日、図書室にいたのだった。

まるで図書室に住む妖精みたいだな、とぼんやりと思った。図書室の静謐さが、もの静かな先輩にはとても良く似合っていた。寧ろ、この空間は彼女の為に造られたかのように思える。

秋が過ぎると、本格的に三年生は受験モードに入る。二年生である私にはまだまだ遠い話だ。兎にも角にも、図書室に倉木先輩が来る回数が日に日に減っていった。

教科の補習や、面談などがあって忙しいのだろう。

先輩に逢いたい。あの綺麗な白い手首を眺めていたい。

ほっそりとした手首。

綺麗な手首。

こんなことを思うことが、先輩の受験に対する冒涇だとは自分でも思う。でも、思わずにはいられなかった。

ある夜、久しぶりにカッターを手にした。愛用のカッター。青いプラスチックと冷えた金属の刃。

カッターの少しの重さが、手に馴染んでいる。

数日ぶりのリストカットだ。

これも全て先輩の所為。

先輩に逢いたいのに、逢えない。厭だ。厭だ。厭なのだ。反時計回りに渦を巻く不満が、心の底にヘドロみたいに溜まっている。我慢ができない。手首にカッターの刃を当てれば、少しは気が安らぐ。血を出せば、それと一緒に厭な思いも抜けていく気がする。

チキチキチキという軽やかな音と共にカッターの刃が伸びる。私を傷つける為の部分が伸びていく。

手首に近づけると、金属のひんやりした冷たさが空気に乗って伝わってくる。それがまた心地良い。この行為を正当化する冷たさだ。

息を止めて、刃と手首がキスをするのをぼんやりと眺める。

瞬間的に痛みが走る。私の左手首にぷつと赤い細線が生まれる。血がわれ先にと滲み出てくる。

この血は私が私である証明。

私がかここにいるという証明。

卑しい私。先輩に逢いたいというのはただの口実だ。本当はあの手首に逢いたいだけだ。受験で忙しい先輩に逢えないのは当然なのに。私は自分のことしか考えられない。愚かな私。醜い私。厭な私。死んじゃえ。死んじゃえ。

傷口を消毒する気も起きず、そのままベッドに倒れた。夜空に浮かぶ月を一瞥してから、カッターを抱いて寝た。

翌日、放課後の図書室で倉木先輩にたまたま出逢った。久しぶりに先輩に逢えたのは良かったのだけれど、なんだか先輩の様子がおかしかった。

「何かしたんですか、先輩？」

「いえ、たいしたことないのよ」

「そうですか？ 元気がなさそうですけど……」

先輩はもともと活発な性格ではないけれど、今日は一段と静かというか、落胆しているみたいだった。

ふと先輩の左手首に包帯が巻いてあるのに気がついた。

「先輩、それ……」

「ああ、これね。昨日の夜に食器を落として割ってしまって。その時にやっちゃったのよ……お陰で勉強ができなくて困っているの」

先輩は左利きだった。傷が痛んで、勉強に集中できないのだろう。

彼女の美しい手首には今やくすんだ白い色の包帯が巻いてあって、あの息が詰まるように美しい白い手首を見ることはできない。

それでも、なんだか嬉しかった。

私と先輩の共通点。

左手首の傷痕。

今まで遠い存在に感じていた先輩が、少し近づいてくれたみたい。

その夜も、私は手首にカッターのひんやりした刃を当てた。

真っ赤な血が半球のドームを作り、やがて流れ出す。これで私と先輩の共通点ができるのだ。毎日毎日傷をつければ、消えることはない。

そう思うと、余計に愉快になり、自然と笑みが零れた。

## 手首（2）

---

翌朝、カッターの刃を出したままで寝てしまったみたいで、右手の人差し指に小さな切り傷ができてしまっていた。傷ができたときの痛みで目を覚まさない自分の睡眠欲の高さにげんなりした。いくら共通点ができたからといって、私は先輩のように決してなれない。

先輩は自分を傷つけることなんてしないだろうし、睡眠に食欲でもないだろう。きっと。

登校すると珍しいことに朝から倉木先輩に逢った。

二日連続で逢えるとは、なんて運が良いのかしらん。挨拶を交わし、上履きに履き替えて先輩のもとに向かう。そこで彼女の人差し指に絆創膏が貼ってあるのを見た。

「先輩、それ……」

私は昨日と同じ言葉しか言えなかった。

先輩の右手の人差し指。

私の傷の場所と全く同じ場所に絆創膏が貼ってあるのだ。

「ノートの端っこで切っちゃってね……あら、水鳴さんも同じところに傷があるようね」

「わ、私も昨日、ちょっと……」

偶然にしてはできすぎている。そう思う。

手首の傷は詳しい場所が解らないから何とも言えないけれど、人差し指の傷が全く同様の場所だなんて。これはいったいどういうことだろうか。

混乱する私に別れを告げて、倉木先輩は友人たちと教室に向かってしまった。

先輩の傷と、私の傷。私の傷が先輩にも傷として残る、ということなのだろうか。

もしそれが本当ならば素晴らしい。

もはや、私と先輩はひとつの身体を共有していると言っても過言ではない。

ああ、なんて嬉しい考えだろうか。

今夜、試してみなくては。自分の身体を傷つけてみれば、すぐに解ることだ。

答えはすぐに解った。

私の身体についた傷は、倉木先輩の身体にもつく。全く同じ場所、全く同じ損傷で。まるで運命共同体だ。そう思う。

私が死んだら先輩も死ぬのだろうか。きっと死ぬのだろうか。嬉しい。私は先輩にはなれないけれど、先輩と本当に繋がれたのだ。自分の傷がそのまま転移してしまうなんて、まるで同じひとつの身体を共有しているみたい。嬉しい。嬉しい。なんて嬉しいのだろう。

夜、リストカットをする度に先輩のことを考えた。

カッターの刃が私の手首を傷つけた瞬間、先輩のあの白磁のような手首にも同じ傷が出現するのだ。そう思うと、ひどく興奮する。自分を傷つけるとともに、先輩の身体も壊している。私はその行為に陶醉した。淫靡な匂いに飲まれていった。

その内に、先輩の手首に傷が生まれる瞬間を直接見たくなった。

いったいどのようにしてあの真っ白な手首が切られるのか。興味がある。

見たい。

どうすれば良いか悩んだのは、一瞬だった。

簡単なことだ。先輩の目の前で、自分の手首を切れば済む。それだけだ。

年末、終業式の日倉木先輩が図書室にやってきた。

私が呼び出したのだ。読みたかった本があるのだけど、書庫にしまわれてしまった。探すのを手伝って欲しい、と頼んだのだ。先輩は快く承諾してくれた。

久しぶりに逢った倉木先輩はとてもやつれていた。左の手首には未だに包帯が巻かれている。それもその筈だ。私が毎夜傷をつけているのだから。そう簡単に傷は癒えないのだし。

「水鳴さんの捜している本って、著者は誰なのかしら？」

書庫に入ると、むわっという黴臭い匂いと、埃の匂いが一斉に私たちを覆った。横に立つ先輩が質問してくる。私は出鱈目な著者名を言った。

「聞いたことのない名前ね……でも安心して。二人で捜せばすぐに見つかるわ」

ふわっと桜の花が咲いたみたいに先輩は笑う。うっとりとその横顔を見つめていると、このまま先輩と書庫に住んでしまおうかとさえ思う。

でも、それ以上に私は。

先輩の、傷が見たいのだ。

先輩の、傷つく様が見たい。如何してなのだろうか。自分でも解らない。私は先輩に傷ついて欲しいわけじゃない。これっぽちも憎んでなんかいない。寧ろ、尊敬しているし、好きなのだ。なのに、何故なのだろう。私はおかしいのだ、きっと。先輩の手首から真っ赤な血が溢れ、滴り落ちるのを心待ちにしている。

棚と棚の間の狭い空間を二人で歩く。

前を歩く先輩の黒い髪を目で追う。右に左に、彼女が歩く度に黒髪が揺れている。

「先輩」

短く呟いてみた。

「見つかった？」

「いえ、そうではなくて」

振り向く先輩。くると黒い髪が回転する。花びらが散った時のような匂いが、鼻腔をくすぐる。

私と目が合う。そして、彼女は知る。私の手に握られている、一本の青いカッター。

チキチキチキと音を立てて、カッターから舌のような刃が顔を出す。

「ど、如何したの、水鳴さん？」

「先輩、知っていましたか……？」

「何、を？」

「私の身体に傷をつけると、その傷はそのままそっくり先輩の身体にもつくということを、です」

そう言って、私はにこりと笑った。先輩の前なら自然と笑顔になれる。

先輩は驚いたようで、言葉が出てこない。静寂に満ちた書庫が、いつそう静まり返った気がした。彼女は何が何だか解らないといった顔だ。

口で言ってもすぐに理解はされないだろうとは思っていた。

だから。

「こうすれば解ってくれますよね」

リストバンドを外した私は、自分の手首に少しだけカッターの刃を押し当てた。鈍い痛みとともに血が滲み出す。すると、先輩が苦悶の表情を浮かべた。

彼女の手首に巻いた包帯に、うっすらと赤い染みができる。ああ、ほらやっぱり、そうだったのだ。今、彼女の手首にも私の手首にできた傷ができているのだ。

図らずもにやけそうになる頬に力を込めて我慢する。

痛がる先輩に詰め寄り、包帯を一気に剥がした。

そこには幾筋もの傷痕があった。茶色く変色しているものの中に、一筋、真っ赤な血が溢れてきている傷がある。

これだ。

これがたった今生まれた、私と先輩の、傷！

「馬鹿なことはよして、水鳴さん！」

先輩が必死になって叫ぶが、もう何もかも遅い。

「先輩、先輩……見せて下さい、先輩の傷つくところ……！」

私は手首にカッターの刃を押し当てると、今までにないくらい深く、そして強く肉を引き裂いた。ぎちっという不気味な音を立てながら、ヴァイオリンの弦を引き千切るように、刃が一筋の線となる。

刹那、溢れ出す血。真っ赤な血が噴水のように宙を舞う。先輩の手首はもう今にも取れそうなくらいぶらぶらしている。少し飛び出ている棒状の物は骨だろうか。

止めどなく先輩の血が流れていく。周りの書棚にかかり、年代物の書物が赤に染まる。夥しい血飛沫の中は、まるで夕日の真っ只中にいるみたいだ、と思った。

美しい。

本当に美しい。

先輩は驚愕の目で私を見ていた。

ごめんなさい、先輩。

私は醜くて、卑しい人間なのです。

今まで大切に下さって、本当に有難うございます。

私は自分の醜い手首に視線を落とす。そこからは先輩と同じように血が溢れ出していて、床や壁には私の汚い血と先輩の綺麗な血が混ざり合っている、筈だった。

「……………え？」

自分の手首からは血が出ていなかった。

寧ろ、今つけた筈の傷すらない。

如何して。

如何して。

私が自分の手首に傷をつけたから先輩の手首にも傷が生まれたのではないのか。

おかしい。

世界が狂っている。

何故だ。

如何して。

厭だ。

私は、自分を傷つけたつもりで、本当は先輩を……。

そんな。

厭だ。

嗚呼。

窓からは夕日が地平線の彼方に沈んでいくところだった。

嗚呼。

私は今何処にいるのだろうか。

夕日の中？

書庫？

血？

きっと、今の私は先輩の血液の中に囚われている。

未だに先輩の血の噴水は、止む気配がない。

気が済んだかしら、とでも言いたげに先輩は私を見てくる。

私は動けない。

きっと、彼女が息絶えるまで、動くことはできない。

遠くでサイレンの音が聞こえた。現実が遠のいていくのが解る。手にしたカッターが、するりと私の指の間を抜けて落ちていった。

床に広がる血溜まりに、ちゃぼんという音を立ててカッターは消えた。

真紅の床に生まれた波紋を、私は暫くじっと見つめていた。

それしかできなかった。



### デペイズマン *Depaysement*

本来は、「故郷から追放すること、本来あるべきところから別のところへ移すこと、それにより異和を生じさせること」の意。シュルレアリストたちの制作を説明する概念のひとつで、「本来あるべき場所から物やイメージを移し、別の場所に配置すること、そこから生じる驚異」を指す。

## 腕（1）

---

帰り道に一本の腕が落ちていた。道の端の白茶けたガードレールの下。長く伸びた雑草の隙間。すっぱりと切り落とされた、人間の腕だった。親指の位置から右手だと解った。

脳裏にバラバラ殺人という不吉な二文字が浮かぶ。恐る恐る近付くと、指が忙しく動いて、「そこのお嬢さん、どうか助けてくれませんか」

と道路に転がる腕が言った。

きっと腕を連れ帰ったら、お母さんに怒られるだろう。小学校の頃、校庭に迷い込んだ野良猫を家に連れて行った時がそうだった。

「歩美ちゃん、生き物を飼うのってね、とても難しいのよ。餌代だっとかかるし、それ以外にもね、お金がすごくいるの。それに猫っていったら柱やなんかで爪を研ぐんでしょ？ ねえ、今すぐにでも戻してらっしゃいな」

優しく言い聞かすように、お母さんは笑い顔を作った。でも、目元だけは笑っていなくて、そのアンバランスな表情が、窓から差し込む夕日に照って怖かった。

「ね、ほら、ねえ。歩美ちゃん、如何してお母さんの言うことを聞けないの。ねえ、今朝だって、今日は雨が降るから傘を持っていきなさいと言ったのに、歩美ちゃんたら持って行かなかったじゃないの」

何かにつけ、ああしなさい、こうしなさいと口うるさいお母さん。あの頃の気持ちはあまり憶えてはいないけれど、反抗したかったのだと思う。

「だって、雨……ふ、降らなかったし……」

「そういうことを言ってるんじゃないのよ！ もし降ったらどうするつもりだったの！」

消え入りそうな私の声が、本当に掻き消されて、お母さんの怒鳴り声が台所に充満した。

「ごめんなさいごめんなさい……」

私は必死に繰り返した。ごめんなさい。それからすぐさま、野良猫を学校まで戻しに行った。空はどんよりと曇り、辺りはどんどん暗くなっていき、腕の中で野良猫がニャアと鳴いた。

あれから三年くらい経った。今度は猫じゃない。腕だ。絶対にお母さんに叱られる。でも、目の前の腕がなんだか可哀想に思えて仕方がない。

「誰かに捨てられたの？」

思わず尋ねていた。遠くで救急車のサイレンが聞こえた。

もうすぐ日が暮れるから、道には誰にもいない。私と、一本の腕だけだ。腕は沈んだ声で言う。

「実は、僕の身体はもう殺されていまして……ほら、死体損壊、という言葉聞いたことがあるでしょう？ あれですよ、あれ。ひどいもんでしょう、ねえ。そしてね、バラバラにされたあと僕はここに捨てられたのです」

周りには血が見えない。腕は綺麗な色をしている。とても死んでいるとは思えない。取り敢えず、家に連れて帰ろう。お母さんにばれたら返しに来れば良い。

「ほら、行こう。ここは寒いよ」

手を伸ばすと、腕はおずおずとこちらに指を向けた。ぎゅっとその掌を握る。暖かい温度だった。

私たちは夕日の中を仲良く家に帰った。あの日、猫を戻しに行った時とは違う暖かい夕日の色だった。

家に着くと、奥からお母さんの声がした。

「おかえりなさい、歩美ちゃん。少し遅かったじゃない」

「あ、えっと、委員会があつて」

「あら、また掃除？ 熱心な委員会ねえ」

「うん。今日が当番だったから」

私の入っている美化委員会は、毎日放課後に校内の掃除をしている。当番制なのだけれど、勿論、私の当番の日は今

日じゃない。確か来週だった気がする。

お母さんは過保護だ。私の入っている委員会から、クラスの席順から、視力検査の結果から何まで全て知っていないと気が済まない。私にとってはプライバシーなんてあったものではない。

学校指定の鞆の中に隠した腕が、少し身じろぎをした。鞆を落とさないように抱えて、そろそろと靴を脱ぐ。

お母さんには本当のことなんて言えない。だから勝手に部屋の中に匿うことにした。

帰宅したのは知れているのに、器用に音を立てないように廊下を歩く。古い家だから、ぎいっという音を立てて床が軋んだ。

エプロンで手を拭きながらお母さんが台所から顔を出す。

「なにこそそそやっているのよ」

「な、なんでもないよ……」

上手く笑えない。心臓がぼくぼくと跳ねる。鞆の中身を見られるわけにはいかないのだ。

幸い、お母さんは、なら良いんだけど、と言って夕飯の準備に取り掛かった。

食事はあとで持って来れば良いだろう。でも、腕っていったい何を食べるのだろうか。

自分の部屋にそそくさと入り、鞆のチャックを開ける。

「ねえ、貴方、いったいどんなものを食べるの」

「ああ、有難うお嬢さん。できれば、コップ一杯の水を戴けますか」

すぐに台所から水を持ってきた。ごくごくと気持ち良いくらいの飲みっぷりに、なんだか私も楽しくなってしまう。

お母さんにばれないようにしないと。そう思った。

その夜は腕と一緒に寝た。

私にはお父さんがいない。物心がつくころにはすでにいなかった。死んでしまったわけではない。でも、今、どうしているかなんて知らないし、知りたくもない。

家の中ではお母さんと私の二人きり。だから、お母さんがよその家よりも私のことを気にかけてくれるのは解るし、感謝もしている。でも、それが最近になって重く感じてしまうようになった。常に監視されているような閉塞感。授業中にノートを書いている時、ふと後ろからお母さんに覗き込まれているみたいな錯角に陥ることがある。そっと確かめるように後ろを向いても、そこにお母さんなんていない。隣の席の長谷川さんに不思議な目で見られたので、以来なるべく気にしないようにはしている。ただ、視線は消えない。お母さんの呪縛から、解放されない。歩美ちゃん、歩美ちゃん、と私を呼ぶ声がずっと鼓膜に貼り付いているような、そんな違和感。厭だ。お母さんのいない学校でも、私は心が休まらない。

ぎゅっと胸に抱えた腕が、ひとつ咳払いをすると、

「如何して、助けてくれたのですか？」

声を忍ばせてそう言った。

それは私にも解らない。わざわざお母さんに隠してまですることなのだろうか、と思ってしまう。解らない。

でも、心がそうしろと言うのだった。

きっと私は淋しかったのだ。誰かと一緒にいたい。ただそれだけのこと。

「困っている人は助ける。当然でしょう？」

恥ずかしいのではぐらかしてみた。月のない夜で良かった。表情がばれずに済む。

有難う、と一言、腕は言うのと眠りについた。

おやすみ、と口の中だけで呟いて私も眠ることにした。

## 腕（２）

---

翌日、朝の食卓。私は上着の中に腕を隠して、朝ご飯を食べていた。

時折、お母さんの目を盗んでは、服の下の腕に玉子焼きをあげた。今日は食べるのが早いよね、とお母さんに感心された。

良かった。ばれていない。それがまた面白くて、私は声を殺して笑った。

テレビからニュースキャスターの抑揚のない声が流れてくる。昨日の夕方、近くの用水路で切断された足が見つかったらしい。そして、夜明け前にも犬の散歩をしていたおじいさんが、切断された胴体を見つけたらしい。上着の中で腕が震えていた。

きっと、彼の仲間たちなのだ。

学校へ行く途中、私は腕と二人きりだ。

腕は学校用の鞆に入れてある。

大丈夫だ。周りにも気づかれてはいないようだ。

腕にだけ聞こえるように話しかける。

「ねえ、朝のニュース。貴方の仲間なんでしょう？」

「ええ、そうです。彼らは見つかってしまった……私は見つかりたくなどないです」

心配そうに言う腕に、優しく諭すように告げる。

「大丈夫。絶対に私が護ってあげるから」

鞆の中で腕がほっと溜息を吐くのが解る。今は安心してくれるだけで良い。

私に何ができるかは解らないけれど、腕を手放したくなどなかった。

そんなことを考えながら歩いていると、後ろから元気な声で挨拶をされた。

「歩美ー！」

振り返るとそこには同じクラスの、穂中凧沙と水鳴瞳が立っていた。

元気が良いのが凧沙。少し大人しめなのが瞳だ。

「今日はいつもより遅いのですね」

瞳の指摘につられて、凧沙も不思議そうに尋ねてくる。彼女の二つに結った黒髪が揺れる。

「登校中に会うのは初めてだねー。今日はお寝坊さん？」

「まあ、そんなとこ……」

腕を鞆に入れるのに苦戦していたなんて言えない。

何事もなかったように、彼女たちと一緒に歩き出す。

友人たちの無邪気な質問が痛い。

私はきっとおかしいのだ。

バラバラにされた身体の一部と一緒に生活をしようとしているなんて。

普通じゃないのは、自分でも解っている。

でも、どうにもならない。私はこの腕とずうっと一緒にいたい。そう思ってしまったのだから。

「歩美もそう思うでしょー？」

間延びした凧沙の声に我に返る。思考に夢中で話を聞いてなかった。

「むー。全然聴いてなかった、という反応だね」

「……ご、ごめん」

「あの、ニュースでやっていたバラバラ殺人のことで……」

瞳が静かに教えてくれた。心臓がどくんと鳴った。焦って鞆を落としたら大変だ。

「ああ、あれね……怖いよね」

曖昧な返事になってしまった。

怖い。そう、それは確かな感想だ。

でも、私が怖がっているのは、犯人に殺されてバラバラにされることではない。この腕と離れ離れになってしまうことが、一番怖いのだ。

「あ、警察の人たちだ」

瞳がぼつりと眩く。目の前の道路には、いたるところに警官たちがいた。きっと腕を捜しているのだ。

ぎゅっと鞆を抱え直す。絶対に気づかれてはいけない。

このまま平然と通り過ぎれば大丈夫だ。

まさか鞆の中に腕を隠しているとは思われないだろう。

然し、まさに警官たちの横を通り過ぎた時、一匹の警察犬が騒ぎ立てた。

私の持つ鞆に向かって、がむしゃらに吼え猛っている。匂いでばれたのだ。そう思ったのも束の間、汗で滑る鞆を、落ちないように必死に抱きしめる。厭だ。

警官たちが訝しげにこちらにやってくる。風沙も瞳も、何故いきなり警察犬が吠え出したのか解らないといった顔だ。

逆に私は、恐怖で顔が引き攣っていることだろう。

如何しよう。

如何しよう。

考えるより先に、足が動いていた。この時ばかりは運動音痴の自分の両脚に激励したい気分になった。

来た道を全力で駆け戻る。

すぐに息が切れる。厭だ。この腕は誰にも渡すものか。もうこの腕には寂しい思いをさせたくない。だから、私は走る。

今、私の身体は風の次に速い存在だろう。

遮二無二足を動かしていると、後ろから警察犬の気配を感じた。このままでは追いつかれる、そう思って後ろを振り返った時だった。

私の身体は交差点のど真ん中にいた。

そして、目の前に一台のトラック。迫る車体。鳴り響くクラクション。全てがスローモーションの世界で、私の考えることは鞆だけは護ろうということだけだった。

次の瞬間には、私の身体は凄まじい衝撃と共に、吹き飛ばされた。

何メートル飛んだのだろうか。冷たいアスファルトに叩きつけられて、ごろごろと転がって、漸く私の身体は止まった。

徐々に感覚が戻ってくる。

生きている。

私は、生きている。

意識が戻るとすぐにあの腕のことが気になった。

周りを見渡すと、すぐ近くに腕が転がっていた。鞆は無残に破れてしまっている。

ああ、何てことだろう。

早く腕のもとへ、そう思い起き上がろうとしたけれど、上手く起き上がることができなかった。

見やれば私の右腕は本来ある筈の場所にはなかった。そこには真っ赤な血が溢れているだけ。どくどくとワインを注ぐみたいに流れ出している。

私の腕は、運良くあの腕の近くに転がっていた。

警官やトラックの運転手、風沙や瞳がこちらにやってくる。

私はまだ起き上がれない。

「早く行って！ お願い！」

力の限り叫んだ。血が喉の奥から溢れ出してきた、咳き込む。違うのに。血なんか吐いている場合じゃない。言葉で、あの腕と私の腕に伝えなくちゃ。

「早く逃げて！」

血を乗せたその言葉は、二本の腕に届いたようだ。

慌てた様子で私の腕はこちらにおじぎをすると、あの腕と手を取り合っ一緒に遠くに駆けていった。

あの腕も最後に、有難う、と言った気がした。

二本の腕は、もうこちらを振り返ることもなかった。

やがて周りが騒がしいことに気がついた。

交差点で血だらけで、しかも腕が欠けた人間がいるのだから。当たり前か。

警官や友人たちが何かを口々に言っているが、もはや私には如何でも良い。

私は腕を失った。しかも二本だ。

残った左腕でふいに流れ出した涙を拭う。必死に去っていった腕たちを捜すけれど、周りにはもうあの姿はなかった

これで良い。

これで良いのだ。

今頃、何処かを必死に走って、必死に生きているのだろう。

バラバラにされてしまった腕。

交通事故で取れてしまった私の腕。

一人取り残された血だらけの私。

みんなバラバラ。

運命に裂かれて、バラバラだ。

でも、きっと見えない何かで繋がっている。

今なら解る。

誰にもそれは見えない。見えなくても確かにそこにある。そんな感じ。

ああ、私はこういう関係に憧れていたんだ。嬉しいな。

頑張れよ、私の腕。

ちょっぴり羨ましいけれどね。今は応援するよ。

あの腕と一緒に暮らすんだぞ。

涙のように溢れる血は、まだ止まりそうにない。

この血が止まった頃に、私はきっと立ち上がれる。

だから今はこの血溜まりに身を委ねて。

目を瞑って彼らの素敵な今を夢想して。

ただただあの二本の腕たちが、一秒でも長く一緒にいられることだけを願うばかりだ。

何処かで彼らを見かけたら、宜しく言っておいて下さい。

### 通過儀礼 *Initiation*

出生、成人、結婚、死などの人間が成長していく過程で、個人がある社会的範疇から別の社会的範疇へ移行する節目に伴う儀礼。古来から行われているものとしては割礼や抜歯、刺青など身体的苦痛を伴うものである事が多い。

## 肩（1）

---

私の肩には穴が開いている。

右肩に、ぽっかりと、ひとつ。初めは、ほくろかと思った。しかし、肌の表面に開いた穴は妙な存在感を放っていた。穴の表面は薄い透明な膜に覆われていて、指で押すと軽く凹む。穴の淵は、青白い黒に染まっている。時折、濃い紫色の燐光がちらつく。植物が気孔を開いて蒸散するみたいに。穴の奥を覗き込んでみても、そこには何もない。血や肉や骨といった、およそ人間に必要なものが何ひとつない。闇がずうっと続いている。もし、この穴の中にすっぽりと納まってしまえたなら……。極寒の地に縛られた悪魔のように、私はそこで眠ることを夢想する。黒く染まる穴の中は、ひんやりしているのだろうか、と思った。

私は小さな頃から、本を読むのが好きだった。親が共働きなこともあり、ひとりぼっちの家の中で、読書をして過ごすのが日常だった。

読書が終わると勉強をしていた。きっと、私には読書と勉強をするしか能がなかったのだ。読書も勉強も、どちらも両親に大変褒められた。

『小乃未（このみ）は良い子ね、偉いわ』

その言葉を聞きたいがために、私は毎日読書と勉強に励んだ。お陰で成績は常にトップだった。実際のところ、成績なんて私にとっては如何でも良かったのだ。ただ、両親に褒められたい、その一心だった。

その状況が一変したのは、中学一年の時だ。

入学して初めての定期試験で、私は一位になれなかった。クラス順位で二位、学年順位でも二位。つまり、一位はこのクラスの誰かなのだ。

返された成績表を握り潰さないようにするのが精一杯だった。

その時、私の鼓膜が不吉に揺れた。

「すごいじゃない、栄子！ 一位になるだなんて！！」

「流石だねー。容姿端麗、頭脳明晰！ 羨ましい！！」

岸辺栄子が褒めちぎられているところだった。

栄子とは小学校からの付き合いだ。彼女はもともとそれほど成績が良いわけではなかったのだけれど。クラスがずっと一緒だったから、彼女のことはよく知っている。登校する時は一緒になることが多い。私たちはいつも、それぞれ二人で一人のように行動していた。そんな訳で、周りからは仲良し二人組みと微笑ましく見られていたと思うけれど。

栄子に対して憎悪が芽生えた。

その日、お風呂に入った時に自分の肩の穴に気がついた。ストレスで胃に穴が開くのも同じだったのかも知れない、と今更ながらにのんびりと思う。

肩の穴は、痛みもしないし、広がるわけでもない。ただ空虚に私の皮膚の上でじっとしているのだった。

それから一年が経った。

「小乃未ちゃん小乃未ちゃん」

栄子の声が、私を呼んだ。

私たちは毎朝、一緒に登校している。学校は家から近いので二人とも徒歩だ。

歩くたびに栄子の長い黒髪が、朝の新鮮な空気の中で楽しげに笑う。

「小乃未ちゃん、これ見てよ」

甘ったるい栄子の声。可愛い唇が言葉を紡ぐ。彼女の手には青く輝く水晶のストラップ。それは私がこの前の土曜日に買ったものと同じものだった。

「えへ、小乃未ちゃんとお揃い」

得意げに笑う栄子。その緩んだ表情にイライラする。

「そ、そうだね。お揃いだね」

栄子のこういうところは昔からだ。私とそっくり同じことをする。髪長さも趣味も、全部、彼女は私の輪郭をなぞる。そこにはもう一人の自分がいるようにも思えるのだけど、栄子は私とは根本的に違う。一言で表せば、彼女は平和なのだ。悩みごとなんてないのだろう。いちいち物事を深く考えない。それが私との決定的な差異。

「これ可愛いよねえ、私好きだな」

うっとりとした表情の栄子が、そっと私に身を寄せる。彼女の体温を感じる。

「ちょっと栄子。歩きにくい」

「えー」

残念そうにしている彼女だが、それでも腕に凭れかかってきて不快だ。栄子の長い髪からはシャンプーの匂いがした。桃みみたいな、甘ったるい匂い。彼女にぴったりだな、とそう思った。

「これ、海みたいで綺麗。だから、好き」

彼女は好き嫌いがはっきりしている。

「そうかな。私には夕暮れの時の空に見えるのよね。群青色っていうか、紫っていうかさ」

「それ、海と同じじゃないの」

「海が青いのは、空が青い所為だよ」

栄子がこんなにも私の真似ばかりするのは、いったい誰の所為なのだろうか。

私は目をふと閉じて、空と海について夢想する。空から降る雨が海に降り注ぐ。青の混じった雨の幾筋が、波の間に落ちては飲まれて消える。そうやって空の青が海に溶け出しているのだ。だから海が青いのは、空が青い所為だ。

「空が青いのは、誰の所為なんだろうね」

水晶のストラップを空に掲げ、栄子は眩いた。白い顎が眩しい。青い水晶の中を通った太陽の光が、青い影を彼女の頬に落とす。彼女の歩幅に合わせて、その青い影はちろちろと揺れて、顔の表面を樂しげに駆け回る。

「そういうものなんだよ。空は青い。綺麗だから、それで良いじゃない？」

「あ、なんか解るかも」

そう言って、ふふ、と笑う栄子に、

「前見ないと、転ぶよ」

呆れた口調で言ってやると、

「小乃未ちゃんがいれば転ばなくて済むよ」

彼女はよりいっそう私の腕にしがみついた。

その時、肩に鈍い痛みが走った。これは、もしかすると穴が傷んでいるのかも知れないな。そう思っているうちにどんどん痛みは大きくなる。

栄子への嫌悪感が痛みのものであるなら、私はどうすれば良いのだろうか。彼女と同じように見上げた青空には、雲ひとつ浮かんでいなくて、無性に涙が出そうになった。

## 肩（2）

---

その日の昼休み、私は栄子連れ立って生徒会に向かった。昨日の帰り際に生徒会長から集まるように言われていたからだ。

給食を食べて体力が回復したのか、授業中はぼーっとしていた男子たちも無邪気に走り回っている。狭い廊下で埃を立てて駆けずるのが男子なのだ、と小学校の頃に学んだ。

隣を歩く栄子との距離は、やっぱり近い。廊下にはロッカーが置かれているから余計に狭いのだけれど、それにしてもくっつきすぎだと思う。

「お昼に集まるなんて久しぶりだよ。何かするのかな」

「来週の評議会のことでしょう、きっと。前もそうだったもの」

各クラス、委員会の委員長と部活動の部長、生徒会役員が集まる評議会。定期的に行われ、活動状況や、次の学校行事の準備をするのだ。

「そっか。そうだったか」

「覚えてなさそうね」

「そんなことないって」

ぱたぱたと右手を振って、栄子は微笑む。きっと覚えてはいないだろう。

彼女は生徒会書記で、私が会計だ。私たち以外のメンバーは全て三年生だから、自然と話が合うのは栄子になってしまう。

生徒会室に入ると、中にはすでに会長が待っていた。長机の上にプリントの束をせっせと置いている。

「あら、来てくれたのね」

上品なデザインの食器が音を立てたような声で、会長はそう言った。

「それは来ますって。会長の頼みですから」

「そう」

にこりと表情が綻ぶ。春の訪れを告げる花畑のようだった。

「それで、会長。何をしたら良いんですか？」

栄子が尋ねると、会長は机の上に詰められたプリントに目をやり、

「簡単よ。これを順番通りに取って行って、資料を作って欲しいの」

十数個の束のプリントを一枚ずつ取って、重ねていけば良いらしい。ゴールにはホチキスも用意されている。

「まずは重ねる作業だけやって、その後でホチキス止めね」

手際よく、会長の指がプリントたちを纏めていく。私も栄子も、それを見てここにきた目的を思い出した。昼休み終了まで、まだ時間はたっぷりある。三人もいればすぐに終わるだろう。

特に話すこともなく黙々と手だけを動かしていると、程なくしてプリントの束が、それぞれ評議会資料として整理されていた。あとはホチキスでひとつひとつ止めていけば完了だ。

会長は先生を呼びに行くと言って、外に出て行った。残されたのは私と栄子。二人きりの部屋で、時計の秒針が働く音と、ホチキスが囁みつく不規則な音だけが空気を振るわせた。

会長が戻ってくるまでに終わらせてしまえば、きっと褒めて貰える。小さい頃はよく褒められたものだ。好きなことが読書と勉強だったというのもある。でも、最近ではできるのが当たり前のように思われてしまっていて、それが私の両肩に重くのしかかる。私は中学二年生、まだ子供なのだ。それが解ってもらえない。及川さんならできるから、と言われても、その勝手な発言に吐き気が込み上げる。私の何を知っているというのか。私にだってできないことはあるのだ。

「小乃未ちゃん、小乃未ちゃん」

甘い声で、栄子が囁く。如何かしたのか、と尋ねると、

「ホチキスの芯がね、なくなっちゃったの」

手のかかる子供みたいだ。そう思って、栄子はまだ子供だし、同い年の私だって同じ子供なのだ、ということに思い至って気分が沈んだ。周囲の視線が思い出される。私を大人扱いしてくる人たちで溢れた教室。厭だ。

「しょうがないな。じゃあ、あとは私がやるから」

プリントの束を彼女の手から取り上げ、ホチキスでばちばちと端を止めていく。

「あ、ありがとう、小乃未ちゃん」

「別に。良いよ、これぐらい」

隣に座る栄子は興味深そうに私の手の中で出来上がっていく資料を眺める。何がそんなに楽しいのか、目を細めている。

あと数束になり、ラストスパートだと思った時、栄子の身体が今まで以上に密着してきた。

「ちょっと、栄子。くっつきすぎだってば」

資料を止めにくい。幸い小柄な栄子の身体は重くは感じないけれど。

「……小乃未ちゃん」

横からぎゅっと抱きしめられる感触。回された栄子の細い腕。長い髪の毛からは甘美な匂いが強烈に漂う。右肩に彼女の顔が埋められる。すりすりと制服の上を擦られる。そこはちょうど穴が開いているところだ。彼女に気づかれはしないだろうか、と場違いなことを考えた。

「……小乃未ちゃん、小乃未ちゃん」

栄子の吐息が首筋を掠めて、思わずホチキスを落としてしまった。大事なものが壊れたような音がして、栄子は咄嗟に私の身体から離れた。

何か言うべきなのか迷っていると、ドアが開いて会長が戻ってきた。時計を見ると昼休みもあと五分しか残されていない。

「お、なんだ、もう少しで終わるね。偉い偉い」

私たちの間に流れる妙な沈黙に気づかずに、会長はにこりと笑った。その笑顔にほっと溜息が出た。一気に現実が戻ってきた。栄子を見やると、顔を真っ赤にして、書類の整理をしている。さっき綺麗に整頓したばかりなのだけれど、それにも気がつかないようだった。

栄子の行動を考える。彼女は何がしたかったのか。正確には、会長があのタイミングで戻ってこなければ、私たちはどうなっていたのだろうか。

答えは解っていた。それも、ずっと前からだ。今に始まったことではない。ただその答えから目を背けていただけだ。

今の関係を壊したくなかった。いや、本当は栄子とはこれ以上仲良くなりたくもなかったのだ。でも、彼女を突き放すことができなかつたのは、私の甘さが悪いのだ。

曖昧なままで、ずっといたかったのに。

栄子は……。

栄子は、私のことが好きなのだ。

長岡先生は生徒から嫌われている。あまり良い先生ではないのだ。英語の担当なのだけれど、発音も上手いとは言えない。

そんな英語の授業中。眠気と戦いながら、黒板に並んだ異国の文字を書き写す。

「じゃあ、この単語の意味を、そうだな……上城、答えてみなさい」

クラスの上城さんはとても地味な女の子だ。肩口で揃った黒髪に、真っ黒な瞳が印象的だけど、控えめで声も小さいから、いるのかいないのか解らないような存在だった。

彼女はあまり英語が得意ではない。

「……解りま、せん」

ぼそぼそと、彼女は口を開いてそのような意味のことを言った。殆ど聞き取れない。

長岡先生は卑しい笑みを浮かべ、

「まったく、こんな簡単なことも解らないで如何するんだ？ 一年からまたやり直すか」

教室中がどっと笑い出した。今この瞬間に笑っている子たちの何割が先ほどの質問に答えられるのだろうか。そんな

ことを冷めた目で考えていると、栄子と目が合った。さっと視線を外される。心なしかまだ顔が赤いようだ。

上城さんは周りからあまりよく思われていない。長岡先生と同じだ。学校という閉じられた場所で、上位と下位ができるのは仕方がないことだ。みんな、不安なのだから。自分が下位にならないように、自分よりも下の存在を求める。いや、求めるだけでは足りない。自分たちで作り出してしまふのだ。それが、ひどく恐ろしい。

私も栄子も成績が良いから、周りのみんなに頼って貰える。それが保険だ。でも、最近ではそうでなくなってきている。私も何か行動を起こさなくては、上城さんと転校生の神代さんの次は私たちかも知れないのだ。勉強ができるだけではだめだ。みんなに有用なところを見せなくてはいけない。それが、今の私なのだ。早く、大人にならなくては。みんなの期待に応えなくては。

だから……。

授業が終わって、上城さんの席に向かう。いつも一緒にいる神代さんはちょうど席を立っていた。私が机の間を縫うように歩くと、横に栄子が並んだ。彼女はいつも私のそばにいる。先ほど、あんなことがあったというのに、今はいつもの栄子に戻っていた。

でも。

でも、それが鬱陶しい。いつもいつも私の真似ばかり。いつも私のそばにくっついてる栄子が、嫌いだ。

「邪魔だから」

私のその言葉に、教室の空気が凍てついたように思えた。

「……………え」

上城さんは絞り出すように、やっとのことでそう呟いた。

「だから、授業の邪魔なのよ、あんた。あんたみたいな馬鹿がいるとね、授業の進度が遅くなって、クラスのみんなに迷惑がかかるの」

心の奥底に沈殿した色々な鬱憤が、言葉の奔流となって溢れ出てくる。止めることは、できない。本当はこの陰鬱な気持ちは、上城さんに対するものじゃないのに。

「解る？ 解るよね？ 貴女はこのクラスでは邪魔者なの」

執拗に、邪魔、と繰り返した。何もかもが、邪魔だ。鬱陶しい。クラスメイトの視線。学校の成績。家族。そして、栄子。

隣に立つ栄子は、私のことを見ていた。私より少しだけ背の低い栄子。ちょっと見上げられる格好になる。

「なんとか言ったら如何なのよ。謝ることもしないの？」

栄子の口が音を紡ぐ。上城さんは何も言えない。

これで良い。これで、クラスのみんなからは“上”に見てもらえる。これで良いのだ。

その時、始業のチャイムが鳴り響いた。周りで見えていた生徒たちも、そぞろに席へと戻っていく。

「行こう、栄子」

栄子に声をかけると、

「うん」

と、綺麗な笑顔で笑った。まるで、おつかいから帰ってきた子供みたいだ。親に褒めて貰えるの待っているみたいだった。

それが。

「えへへ」

そう笑う栄子が。

栄子の笑顔が。

厭だ。

壊したい。

この笑顔。栄子のとびっきりの笑顔。壊したい。そう思った。

私は大人になりたかった。心の奥底ではきっとそう思っていた。

口ではまだ子供だし、と言いつつ、頭では周りの期待に応えたいと常に思っていたのだ。

周囲の視線は、今の私を見ていない。ここにはいない“大人の”私を見ているのだ。それがどれだけ辛いことか彼らには解らない。都合の良いように他人を見る。それだけだ。解る筈がない。

とにかく、私は早く大人になりたかった。ならなくてはいけなかった。

それなのに。

いつも一緒にいる栄子は、私をそれ以上の存在として見ていた。

それは“親としての”私。彼女は私に母性や父性といったものを求めている。エリック・バーンの提唱した交流分析みたいだな、とぼんやりと思った。

私は大人として生きていくべきなのに、栄子はそれを許さない。私に甘えたがる。それが重い。厭だ。厭なのだ。

だから、壊さなくてはいけない。

調理室を借りると言って、調理台にある果物ナイフを拝借した。その足で栄子を呼び出した。

夕暮れに染まる生徒会室。橙色の世界で、動くのは私と栄子の二人だけだ。彼女は知っているのだろうか。私のポケットの中にナイフが忍んでいるということ。これから私が、彼女の命を奪おうとしていることを。

目の前でちょっぴりぼーとした表情をする栄子には、何も解らないのだろう。

「前からね、ずっと言いたいことがあったのよ」

沈黙が降る中、唇を動かす。少し掠れた声になってしまった。緊張の所為だろうか。

「実を言うと、私も、その……」

栄子も同じように口を開いた。長い髪の毛がオレンジの光に照らされて、水面に浮かぶ夕日に見えた。

「小乃未ちゃん……」

甘ったるい声で、私を呼ぶ栄子。潤んだ瞳には傾いた太陽の橙と、私の顔が映っている。一步、彼女は前に出る。私との距離が近づく。

「私、小乃未ちゃんのこと……」

その先は解っている。彼女が私のことをどう思っているのか。そんなこと、とっくに解っていた。でも、私には現実を見つめる勇気がなかった。彼女を受け入れる覚悟がなかった。

ずきずきと肩の穴が痛み出す。

栄子の可愛い唇が、言葉を紡ぐ。

「小乃未ちゃんのこと、好きなの」

一瞬、時間が止まったかのような錯覚に陥る。砂時計の砂が、落ちることを諦めてしまったみたいに思えた。時計の針の音さえも掻き消えて、世界に私と栄子の二人だけしか残されていないような、そんな不安感と妙な充足感が心を満たす。

「小乃未ちゃん……」

その呼びかけに、私はもう限界だった。これ以上栄子の顔を見ていたくない。

ポケットから小さなナイフを取り出して、彼女に向ける。栄子の言葉は、そこで失われた。夕日に煌くナイフの輝きが、彼女の頬を掠める。

「な、に……」

「ごめんね、栄子。私は、貴女を殺したいの」

言った。言ってしまった。遠くの空でカラスの鳴き声が聞こえた気がした。

「殺す、って……」

困惑した表情の栄子。

「だって……だって、私、小乃未ちゃんのことか」

「私は、大嫌い」

「……っ」

「いつもいつも、私の真似ばかり……！」

「だって、小乃未ちゃんのことか好きなんだもん！」

「それが鬱陶しいって言ってるのよっ！」

「あ……え、つと……」

肩で息をする私に、なんと行って良いのか解らないのだろう。それで良い。栄子はこのまま素直に殺されれば良い。そうして、私は大人になるのだ。子供では殺人なんてできない。だから、だから……。

両手できつく握ったナイフの切っ先を、彼女の心臓に近づける。栄子は呆然と立ったまま、銀の閃光を眺めている。少しだけ膨らんだ栄子の胸に、ナイフの先端が触れた。途端、電気でも走ったかのように、栄子に生気が戻った。

「小乃未ちゃん……」

穏やかな、いつもの声が出た。栄子がこちらを見ている。うっとりとした瞳で、こちらを、見ている。

「小乃未ちゃん、殺して、くれるの……」

「そうよ、あんたは私には重い。だから、ここで捨てる」

傍から見れば、ナイフを挟んで、同じ容姿の少女が向き合っていることだろう。私と栄子は瓜二つ。全ては彼女が悪いのだ。私のことを真似するから。

思い出だけでむかむかと胃の中がひっくり返るような不快感が襲ってくる。今ここで栄子を殺さなくては……。

肩の穴が、微痛をもたらす。痛い。でも、殺さなくちゃ。

痛みを紛らわすのは、言葉に想いを込めるだけで良かった。ただ短く、それでいて的確に、

「死ね」

そう呟いた時だった。

栄子の顔がすぐ目の前にあった。思考が止まった。閉じられた両目は、まるで呼吸をしていない人形のように。長い睫毛が、私の瞳を撫でようとする。

冷静になるとすぐに現状を理解した。不思議な感触があるのは、私の唇が栄子のそれと触れ合っているからだ。蕩けそうなほど柔らかい栄子の唇。何も考えられない。背中に回された彼女の腕が、場違いにも心地よく思えてしまう。

「小乃未ちゃん……小乃未ちゃ、ん……」

うわ言のように栄子は囁き、私の唇の上を踊る。ただひたすらに舞うだけの、稚拙なキス。

けれど、そのダンスも長くは続かなかった。

「小乃未ちゃん……小乃未ちゃ、あ、げほ……っ」

突然、咳き込む栄子。血の味。

ああ、そうか。あの距離で私にキスをするということは、そういうことか。

気がつけば、私の両手は真っ赤に染まっている。栄子の胸から溢れ出す夥しい量の真紅の血。柔らかく感じたのは、小ぶりの胸。そこから、止めどなく鮮血が流れている。

彼女自ら胸にナイフを差したのだ。私との距離を埋めるために。

辛そうな呼吸で、栄子は笑う。

「小乃未ちゃん、私ね、ずっと……ずっと、小乃未ちゃんのことか好きだった」

彼女の瞳はどこか別の世界の私を見ているようで。ふらふらと視線が定まっていない。

「小乃未ちゃんのこと、考えるとね……胸が苦しくなって、切なく、なって……」

盛大に咳き込み、私の制服に血が飛び散る。

「私は、あんたが嫌いだったんだよ……どうして、そんな私のこと」

「空が青い理由とおんなじ、かな……理由なんて、なくて……きっと、そういうものなの……」

しなだれかかる彼女の身体は血が抜けた分、余計に軽くて、容易に死を想像させる。ナイフは柄まで刺さり、栄子の制服も真っ赤に染まってしまっている。

「この胸の痛みは、小乃未ちゃんのかくれた、最高の贈り物だよ」

そう言って、栄子は血にまみれた顔で、ゆっくりと微笑んだ。

「今まで……好きで、いさせてくれて、有難う……」

力の抜けた栄子が倒れそうになるのを、受け止める。ひどく軽い。彼女は、死んだのだ。

「……栄子？」

名前を読んでみても、返事はない。

本当に、死んだのだ。

私が、殺したのだ。

ああ。

私が殺したのだ。

目をしっかりと閉じた栄子の身体が、かくんと足から崩れ落ちた。途端、肩の穴に激痛が走った。内から溢れる熱の濁流に、私は立っていることができなくなる。ぺたんと床におしりをつけて、肩から流れ出す血で染まった右腕を見やる。制服は一瞬でぐしょぐしょに赤く染まっていた。

穴の膜が破れたのだ。見なくても、服の上からでも、それが私には解った。解ってしまった。この痛みは、栄子を殺した痛み。心の痛みが、穴から噴出し、私の身体を染め上げる。少女が大人になるための、痛みだ。

私は大人になったのだ。

それが解って、歓喜した。今にも踊りだしたい気分だ。やっと、やっと大人になれたのだ。彼女の死を受けて、私は、やっと。

栄子を見ると、穏やかな顔で事切れていた。その笑顔を見ると、胸が痛む。だめだ。私は大人なのだから。冷静に、冷徹に、現実を受け止めなければいけない。私は大人なのだから。

だから。

彼女のその笑顔を、壊さなくてはいけない。

手近にあった椅子を持ち上げる。肩が痛む。血が溢れる。ぽたっと流れ出た鮮血が、重力に引かれて落ちていく。栄子の柔らかい頬に、垂れて一筋の涙みたいになった。

いつまでも微笑む栄子に、私は椅子を振りかぶった。

さようなら。彼女の最後の笑顔に、私は笑ってそう呟いた。

マーヅナル - マン *marginal man*

文化の異なる複数の集団に属し、そのいずれにも完全には所属することができず、それぞれの集団の境界にいる人。境界人。周辺人。

## 背中（1）

---

背中を押す。

そんな言葉を思い出すのは、いつも駅のホームだ。

——一番線に電車が参ります。黄色い線の内側まで——

遠くから電車がやってくる音。軋むレールが錆びた声を上げた。

——一番線に電車が参ります。お気をつけ下さい——

二つの白く灯るライトがやってくる。

そんな時、俺は思い出すわけだ。

背中を押す、という言葉。

電車は自分の前まであと数メートルの距離。後ろから背中を押されたら……。背中に衝撃を受けた俺の体は前につんのめり、ホームに叩きつけられて、電車の無慈悲な重い車輪に巻き込まれて、それから、それから……。

俺はそんなことばかり考えている。

電車はもう一、二メートルのところまで迫って来ている。

今、背中を押されたら確実に轢かれる。そんな距離。

しかし、俺の考えていることなんかお構いなしに電車はホームに滑り込む。騒がしい音と共に停車し、中からわらわらと人の群が溢れ出す。

溜息をついて、俺は電車に乗り込んだ。

こんなことを考えるようになったのには理由がある。

あれは二ヶ月程前のこと。ある雨の降った日の帰りだった。

雨が降っているせいか、いつもより人気のない駅のホーム。もう少しで電車がやってくる筈だ。濡れた線路を眺める。このレールはどこまでも続いているのだろう。まるで血管みたいだ。国中のあちこちに張り巡らされた管。この管は鉄の塊に人間という社会を動かすためのものを運ぶ。

そんなことを考えながら電車を待っていると、数メートル先に同じクラスの夢霧円が立っているのを見つけた。『円』と書いて『まるみ』と読む、変な名前のやつだ。

両目を半分以上隠すほど伸びた前髪、肩まで伸びた黒い髪、そして片手には黒い傘を持っている。制服が黒を基調としているので、なんだか葬式の帰りのような奴なのだ。

夢霧の前には一人のくたびれたサラリーマンが、鬱屈な空を見上げている。俺に気付く様子もなく、夢霧は前のサラリーマンの背中を見つめている。

彼女は内気な性格だが、クラスで浮くこともなく、だが中心にいることなんて勿論なく、クラス内ヒエラルキーで下の上くらいのところにいる。成績が良いという話も聞いたことがな。運動も苦手そうだし、何処にでもいる女の子だ。俺が夢霧について知っているのはそれくらい。あまり話したことないし。

でも、もしかしたら気付いてくれるかな、と淡い期待を持って夢霧のことを眺めていた。

——一番線に電車が参ります。黄色い線の内側まで——

アナウンスが響き、電車がホームを目指して減速する。ありきたりで、見飽きてしまった景色。雨の粒子を照らす二

つの輝くライト。忙しく動くワイパー。甲高いブレーキ音。電車の眼前に舞うサラリーマン。飛び散る紅い紅い、血。

俺は自分の目を疑った。最後の方がおかしくなかったか？いつもの有り触れた世界じゃないぞ！

夢霧の目の前に並んでいたサラリーマンが、線路に落ちたのだ。そして、呆気なく電車に轢かれたのだ。

電車の下から紅い血が染み出してくる。その血はやけに生命力に溢れているように見えて、あのサラリーマンの未練がヘモグロビンに乗り移ったかのようなようだった。先ほどまで線路を血管に見立てていた俺には、少し罪悪感めいた感情が芽生えた。

すぐに車掌が電車から飛び出して、線路に降りた。それを見る好奇の目、恐怖の目、気色悪いものを見たという目。

そして、愉悦の目。

悲鳴を上げる人や携帯で誰かに電話をかける人に混じって、夢霧円は独り、孵化寸前の悪魔みたいに口元だけを歪めて嗤っていた。

夢霧はくると踵を返すと、駅を後にした。その後ろ姿を追いかけることもできずに、俺はただ降りしきる雨を眺めた。

雨が、血を洗い流していく。

翌日、朝早くに登校して、真面目に放課後まで授業を受けたが、夢霧がクラスにやってくることはなかった。

「ま、昨日の今日だし、当然か……」

そう呟いて校門を出ようとした時、門柱に凭れかかっている人間の視線を感じた。

視線の主は案の定、夢霧円。俺が口を開くよりも先に、夢霧の薄い唇が動いた。

「昨日、見てたでしょ」

疑問形ではない、確認の問い。

俺は無言で頷いた。夢霧は何の感慨もなさそうに、

「そう」

とそっけなく言った。

「どうして、あんなことしたんだよ？」

それを訊くのが俺の役目であるように感じた。だから、訊いた。

「たいした理由じゃない」

「むしゃくしゃしてやった、とか？」

多分、夢霧はそんな下らないことで殺人なんかしない。それは解っていたけれど。

「違うよ。ただ、見たかったんだよ」

何を、とは訊かなくても解った。なんとなくだけで、理解してしまった自分がいる。

「人が死ぬ瞬間っていうのをね。だって、他の殺し方だと警察にばれちゃうかも知れないでしょ？ 刺殺、絞殺、毒殺、撲殺、圧殺、射殺……どれも直接私が干渉しなくちゃいけない。でも、死因が事故と断定されるような状況での殺人なら、容易だよ。証拠もない。指紋も残してなんかいない。だから、私は捕まりっこないんだよ……そんなことが訊きたいわけじゃないって顔だね。敢えて理由を説明するなら、そうだね、単なる興味なんだよ。初日の出が見たい、流れ星が見たい、七色の虹が見たい、美味しい物が食べたい、素晴らしい音楽を聴きたい、それと一緒に。珍しいものは見たいでしょ。死とは何か、何時、如何なる場合に発生し、死が外部にどう影響を与えるか、私はそれを知りたかったんだよ。手っ取り早くて、且つばれにくい、それがホームに人を突き落とす行為に繋がったわけ。勿論、あの男の人に恨みがあったわけじゃないよ。あの人は運が悪かっただけなんだよ。私の興味を満たす為の生け贄のようなものかな……それで、その真相を知ってしまった君は、これから如何するのか。警察に私を突き出す？」

夢霧が漸く言葉を紡ぐのを止めても、俺は言葉を発することができなかった。

正直、警察に行こうとは思わない。

俺が何も言わずにいると、夢霧は半分以上隠れた瞳で見つめてくる。

「素敵な眼をしているね」

「そうか？」

「うん。君の死ぬところが見たくなっちゃう」

そう言うと夢霧は淡く微笑んだ。それはクラス内で見せるいつもの笑顔ではなかった。そのままくり、と踵を返して彼女は何処かへと歩いていってしまう。

気丈に振舞っていたかに見えたが、手足が少し震えているように見えた。殺人なんて取り返しのつかないこととしてしまって、それに怯えているように。

その後ろ姿に俺は、

「おい、夢霧円」

背中を向ける少女の名を呼んだ。

びくりと肩を震わせて、俺の方に顔だけ向ける。

なんでこいつが私の名前を知っているのだろう、って顔してやがる。

「俺には高瀬裕太って名前があるんだ。クラスメイトの名前ぐらい覚えろよな」

「……わ、私は、私が興味のないことは憶えないの。だから、クラスメイトなんて」

「じゃあ、俺のことくらいは憶えておいてくれ。それじゃな夢霧、明日また学校で」

「き、気安く呼ばないでよっ」

俺はそう言うなり、駆け出した。抗議の声は勿論、無視。

夢霧がその後どうしたか、そうするのか、そんなことは一切考えなかった。背中で、彼女の存在だけは感じ取れていたから。

## 背中（2）

---

明日また学校で。

俺はそう言ったのに夢霧はそれ以来登校してくることはなかった。高校は義務教育じゃないから、一年の内に学年で一人か二人は辞めていく。そんなやつらに埋没するように、夢霧円という少女はいなくなった。

あの夢霧が警察なんぞに逮捕されるわけがない。なんとなくだけど、そう思った。だから、あいつはまだ何処かで生きている。

心の隅っこでは、また逢えるのを期待していた。

きっと、俺は夢霧のことが好きなのだ。

なんであの時、校門の前で別れた時に伝えられなかったのだろう。そんな後悔に苛まれる日々が続いた。

そんなわけで、今日も俺は唯一残った接点、駅のホームで電車を待っている。

正確には、夢霧円のことを待っているのかも知れない。

今日もあの日と同じ雨だ。

とことん陰鬱に降り続けている。

それになんだか今日は人が珍しく一人もいない。

まあ、こんな雨の日になんか外に出る必要もないしな。

———番線に電車が参ります。黄色い線の内側まで———

アナウンスが鳴って、電車が音を立ててやってくる。まるで怪鳥の悲鳴みたいな音と共に。

———番線に電車が参ります。お気をつけ下さい———

ふと、背中に温かい感触があるのに気づいた。2ヶ月ぶりのあの存在感。

後ろを振り返らなくても判る。俺は安堵と一緒に言葉を紡ぐ。

「遅えよ、夢霧」

後ろから、静かな声が聞こえてくる。

「ごめんと、さよならを言いに来たんだよ」

俺たちが短い会話をしている間にも、どんどん電車との距離はなくなっていく。

あと五メートル、四メートル……。

背中に当てられた夢霧の手に熱がこもる。

俺も自然と強張ってしまう。当たり前だ。この歳で死ぬのは、実際のところ厭だ。

でも、それでも、夢霧に殺して貰えるなら。それは理想の死に方に思えたのだ。

あと三メートル、二メートル……。

ドンツという衝撃が背中に伝わる。俺の体はそのまま前のめりに傾ぐ。電車との距離が縮まる。そして。そして、電車はブレーキ音を掻き鳴らしてホームに止まった。

俺の目の前で。

「……え？」

ぼかんと口を開けたまま、俺は爪先立ちで立ち尽くす。文字通り目の前の状況への理解ができなかった。そして、夢霧の行動にも。

「どうしてだ、夢霧」

「私は君の……高瀬の死ぬところが見たい。でも、その、なんて言うか……えとね、高瀬には死んで欲しくないんだよ

」

そう呟く夢霧の腕は背中越しに俺の腹のあたりに回されていた。つまり、俗に言うところの抱きつく、という格好になっているのだった。

彼女の柔らかい髪の毛の匂いが、小雨の舞う空気の中に漂う。

「私、自首する」

震える声で彼女は言った。

電車は、乗り込まずに抱き合っている高校生二人を置いて出発してしまった。

ホームに他の客がいなくて良かった。心からそう思った。もし誰かに見られたら、恥ずかしくて死んでしまう。勿論、電車の中からは見られまくっているけど。そこは気分の問題だ。

「だからね……ごめんと、さよならを言いに来たの」

「そうか」

そういうことだったのか。てっきり俺は勘違いしていた。

殺すからごめん、殺すからさよなら。そう思ったのだけど違った。

死なずに済んだことにほっとする反面、少し残念な気持ちもした。

それでも、夢霧と今こうして会話できていることが、俺にはたまらなく嬉しかった。

ホームの片隅にあるベンチに座って、俺たちは近況について話した。ペンキの剥がれたベンチの表面は、しっとりとしめっていた。

とても下らないつまらない話。それでも、夢霧は笑ってくれた。殺人を犯した人間にしては、綺麗な笑顔だと思った。

「未だに、解らないんだよ」

「何が？」

長い前髪の隙間から俺を窺うようにして、夢霧は話し出す。

「如何して人を殺してはいけないのか。ずうっと昔から殺人は駄目だと決まっているんだよ。別に法律で禁じられているから、悪いことだからやってはいけない、っていうのでは解決できない。じゃあ、如何して法律で禁じられているのか、如何して悪いことなのか。如何して悪いことはやってはいけないのか。考えれば考えるだけ疑問ばかり出てくる。それに法律で禁じられていなくても殺人をしない人はいるだろうし、法律で禁じられていてもこうして殺人をしてしまう人もいるんだよ。だからね、殺人が悪いことだと言われるのには何か理由があるんだと思う。あと、一つ考えたことがあってね。殺人は世間一般で間違ったことだと教えられるでしょ。幼い頃からそう言われ続ける、一種の洗脳だよな。良いとか悪いとか、正しいとか間違っているとか、そういうのって押し付けられるものなのかな。押し付けて良いものなのかな……私もね、その、心の何処かでは殺人はいけないことだって考える自分がある。あの時、あのサラリーマンの背中を押すのにどれだけ体中の震えを我慢したことか。今でもね、あの日のことを思い出すと狂いそうで、吐いてしまうんだよ。あはは、ただ人の死が見たかっただけなのに。あれが死なんだ、って思ったら涙が止まらなかった。早く警察にでも捕まれば良いって思った。でもね、あの日、私が殺人をした次の日、高瀬が初めて私の名前を呼んだ。初めてっていうのは、そのまま初めてってこと。生まれて初めて人に名前を呼ばれた。出席簿のチェックとかは別だよ。そういった事務的なものじゃなくて、もっと、そのなんて言うのかな、あったかい名前の呼び方をしてくれたんだよ。それでね、本当は高瀬の死ぬところが見たいと思った。でも、なんでか心が止めて、と叫ぶの。ねえ、如何して？ 殺人は間違ったこと？ こんなにも心を苦しめるけど、本当に悪いことなのかな？」

肩で息をしながら、自分の想いをぶちまけた夢霧は俺に詰め寄る。今にも寒さで死んでしまう小動物みたいな、怯えた目で俺を見据える。

俺はなるたけあっさりと言う。

「さあな」

「さあな、って！ 私の話ちゃんと聴いてたの！？」

「長すぎて、最初の方とか忘れちゃったよ。でもな、夢霧。何が正しくて、何が間違っているかなんてのは、自分で決めるんだよ」

「自分で、決める？」

ぼかんとしている夢霧に、

「そんなもの、誰かに押し付けられるものじゃない。況してや押し付けるものでもないだろ？ 自分すら信じられなくなったら、そこで終わりだよ。自信を持って、夢霧。間違いを恐れるな」

俺がそう言うと、夢霧は小難しい顔を更に歪めて、それからふと優しい顔になって、

「そういう考えも、ありかね」

そう呟いた。

「そうだよ。自分の考えを警察のやつらに披露してやれ」

「……そうだよ、ね」

「おう」

雨の音が止んだ。きっと、これから晴れてくる。

隣では、必死に悩んでいた夢霧が、ぱあっと明るくなっていく空を見上げている。

「お前、そんな表情もできるのな」

俺がそう言うと、夢霧はむう、と唸りはにかんだように下を向いた。

つと視線を俺に向けると、夢霧は尋ねた。

「ねえ、高瀬。如何して君はあの時、私が後ろに立った時に逃げなかったの？ 背中を押されて、死ぬと思ったら怖くて動けなかった？」

小首を傾げて訊く彼女に、俺はそっけない感じで言ってやる。

「お前になら殺されても良いかな、なんて思った。それだけだ」

両目をまん丸にして、夢霧は驚いていた。そりゃそうだろう。自分でも思う、普通の考えじゃないってことぐらいは。そして、なんだか死ぬほど恥ずかしい。

それでも、夢霧はそっか、と言って微笑んだ。

自首しに行く、と言って夢霧は立ち上がる。

「もう逢えないのかな」

気付けば、口が動いていた。不安げに揺れた彼女の瞳を、俺は忘れない。

「わかんない」

夢霧は震える唇で、一人で取り残された幼児みたいに、恐々と声を絞り出した。

「でも、約束。きっと、また逢えるよ」

澄んだ瞳は、もう揺れていなかった。少しだけ笑った俺が、そこに映っていた。

「ね、約束」

おずおずと差し出される小指。ちょこんと袖から顔を出した小さな手は、やっぱり震えてなんかいない。夢霧は、強い。そう思った。

俺はその指に自分のものを絡める。ひんやりとした夢霧の体温が伝わる。

「約束、な」

短くそう言うと、こくりと、それでも確かに、夢霧は首を縦に振った。

途中まで送るよ、と俺は言ってみたけど、迷惑、の一言で拒否された。全く人の親切ってものを解っていない。

「まあ、いっか」

心なしか胸を張って歩く夢霧の背中。

あの長い前髪はきっと厭な世界を見ないためのもの。

でも、今は精一杯に、あいつなりに精一杯に胸を張って、世界をじっと見上げて歩いていくのだろう。

こうして、俺と夢霧円との極めて短い交流は終わったのだった。

結局は、あいつの背中を俺が押した形になっちまったなあ……。

一人そう思って、

「あ、なんか今すごく上手いこと思いついたぞ俺」

そう呟いた。

こうして、俺たちはそれぞれの帰路についた。  
互いに互いの背中を向けて。

シックスセンス *sixth sense*

《五感以外にあって五感を超えるものの意》理屈では説明のつかない、鋭く本質をつかむ心の働き。

## 足（1）

---

眠っている時にびくっと身体が震えることがある。

それはあの世の住人が、寝ている人の足を引っ張って、あちら側へと呼び寄せようとしているかららしい。

私はあの世がどうのだから、あまり考えたことはないけれど、昔から幽霊を見ることがよくあった。木や石や雲なんかと同じで、死んだ人の霊も、当たり前のように存在していた。他の人にはそれが見えていない。そのことに気がついた時にはもう遅かった。私は、周りからは変なものが見えるやつ、として敬遠されていた。

この惑星の上には、生者よりも死者の数の方が多い。歴史の重みだ。生者が生まれていく。死者が生まれていく。世界は悲しみに埋もれていく。

もし仮に、今まで地球上に生まれて死んでいった人たちの幽霊を全て見ることができたなら。きっと足の踏み場もないくらいに霊で溢れかえってしまう。

そうすれば、私以外の誰かにも、幽霊が見えるだろうか。悲しみに濡れたあの顔を、誰かに見て貰えるのだろうか。

それはちっぽけな妄想。もしかして、私が幽霊を見えるというのもただの妄想なのかも知れない。現に周りはどう思っていたじゃないか。

私に見えるもの、周りには見えないもの。その違いは何なのだろう。人間の目はそれほど信じられるものではない、ってテレビでやっていた。錯視というものだ。私たちが見ている世界は何処までが本当かなんて、解らない。普段は目で見て物事を判断しているけれど、それ自体がどれほど信用できるのか。そもそも世界の本当の姿なんてあるのかどうか。

朝起きると、そんなどうでも良いような考えが頭の中をぐるぐる回っていて、少し気分が悪い。寝覚めが悪い時はたいてい幽霊が傍にいた時だ。ふと足を見てみると、くっきりと手形がついている。親指の位置から右手と解る。赤く腫れた私の細い足。幽霊が私を連れて行こうとしていたのか。

幽霊を怖いと思ったことはない。怖い話を聞いても、ふーん、くらいにしかならない。それは私が普通と違うからだ。

恐怖心が欠如しているのだろう。生への執着が希薄。解ってはいるけれど、どうにもできない煩わしさ。

日に日に霊の手形は大きく、そしてくっきりと残るようになっていく。もうそろそろ死ぬってことなのかな。あちら側からお呼びがかかっているのかも。

まだ死にたくはないな、と思ったら、お腹が鳴った。朝ご飯を食べよう。

殆ど記憶は残っていないけれど、幼い頃の私は生まれつき足が不自由だったらしい。一人で立ち上がることもできず、車椅子での生活を送っていた。それがある日突然、奇跡でも起こったかのように歩けるようになったのだそうだ。

古びたアルバムのページを一枚ずつ捲っていくように記憶を辿ってみても、歩けるようになった小学校低学年までの記憶が曖昧で、うまく思い出せない。何処か霞がかかっていて、判然としない。

そのことを考えるたびに少しだけ不安になるのだけれど、今では十分と言って良いくらいに不自由なく生活している。過去は何度も振り返ることができるから、厭なことは何度も思い返してしまう。後ろを振り返って、自分の足跡を見ることができるのと同じように。でも今は、それも良いな、と思うのだ。自分の足跡を地面に残すことができるようになったのだから。車椅子の車輪の跡ではない、自分自身の、生きた証。

もしかすると、私がよく幽霊を見てしまうのも、幼い頃の病院生活の所為なのだろうか。確かに病院にはたくさんの幽霊がいる。

健康になった私の足に悪戯をする霊もいるのだけど。

そっと靴下を捲ってみると、すでに手形は消えていた。こうして過去の痛みや傷は消えていく。癒えていく。

歩けるようになって、走れるようになって、そこに自分を見出した私は、中学校に上がってすぐに陸上部に入ること

に決めた。今は短距離の選手として、大会ではそこその順位に食い込んでいる。走るの好きだ。自分の足で、大地を踏みしめ、蹴り、前へと進む。その繰り返しかつ、走っている時だけ、私は私でいられる気がするのだ。

だから、体育の授業でスポーツテストのための記録を測るのは、私にとってはひとつの楽しみになっていた。

先生の号令がかかって、次が自分の番だと知る。

五十メートル走だ。四人一組で走る。

腕を肩幅に開き、右足を前、左足を後ろにしてしゃがむ。クラウチングスタートだ。ぱん！ と小気味良くピストルが叫んで、私たちは一斉に走り出す。

我ながら良いスタートを切れた。

頬を切る風の音が聞こえる。私の足が一步一步、着実に大地を踏みしめる。後ろに蹴り上げられた細かな砂利が、時折、腿の後ろに当たる感触。前を走る子は誰もいない。私が一番なのだ。

そう思った時だった。後ろからタッタタッタと軽快な足音が聞こえる。誰だろう。クラスに、私に追いついて来られる生徒がいただろうか。スタート時の面々を思い出してみても、これっぽっちも解らない。

とにかく意識を集中させようと思った矢先、私はやすやすと追い抜かれてしまった。速い。風の中にワルツを踊るかのように揺れる黒い髪が見えた。結局追いつくことはできずに、二番手でゴールすることになった。先生の声が冷たい空気に溶け込むように、聞こえた。

「走り終わってもすぐに止まるなよー。ゆっくりで良いから歩けー」

一番手でゴールした、白鳥慧子がその声に頷いた。

「解ってますー」

間延びした声。いつもの白鳥さんだ。

彼女は普段からやる気のないことで有名だった。でも、三年生になってからというもの、白鳥さんは別人のようになった。いや、正確には変化は去年の夏からあったのだ。

中学二年生の夏、学校から一人の少女が消えた。転校したわけではない。校舎の屋上から飛び降り自殺をしたのだと聞いた。ちょうどその時は部活動の最中で、私はグラウンドを走り終えて休憩していた。陸上部の部室でペットボトルから水を飲んでいると、外が騒がしいことに気がついた。すぐに先生たちがやってきて、詳しいことが解らないまま家に帰ることになったのだ。

生徒が自殺をした、というのは翌日に知った。朝から全校集会が行われた。

あの日を境に、学校の中は何処か異様な空気に包まれるようになった。良い意味で変化したのは、白鳥さんだ。今までのだらけた生活は一転した。自殺をした上城光さんと何かあったのだろうか。聞けば一年生の時は同じクラスだったらしい。仲が良かったのだろうか。

上城さんと話したことの無い私には、彼女の死があまりにも遠い世界の出来事のような気がして、全校集会で校長先生がお話されている時でも実感が持てなかった。

家に帰って、テレビのニュースで報道されているのを見て、ああ、本当に死んでしまったんだな、と思った。

「足、速いんだね、モッチー」

前を歩いていた白鳥さんが急に振り向いたので驚いた。背中に垂れた髪の毛が、ふわっと揺れる。甘い香りが鼻を掠めて、思わずくしゃみが出た。

「風邪ー？」

「ぐすつ……ううん。それより、モッチーって」

「私が考えたの。厭かな」

「ええっと……厭、というか」

彼女は変わっている。人にあだ名をつけたがるというのもそうだけれど、何よりもあまり話したことの無い人にもいつもの態度で接するのだ。裏表がないのだった。

「なんで、モッチー？」

「きなこ餅、美味しいよねえ」

両手を頬に当ててうっとりする白鳥さん。きなこ餅、と聞いて少し考えて、閃いた。私の名前は、

「佐々木奈子。ね、木と奈子で、きなこ！」

白鳥さんが得意げに言う。佐々木奈子、というのは私の名前だ。小学校の頃はよく『きなこ』と呼ばれてからかわれ

たものだ。

「モッチーは陸上部だよね。だからあんなに速いんだ」

にっこりする白鳥さんに少しいらっとした。それはまるで、陸上部なのに何もしていない白鳥さんよりも足が遅いと言われているようで。

曖昧に笑ってやり過ごすしか、できなかった。

## 足（2）

---

体育の後の授業には全く集中できなかつた。それも全て、白鳥さんの所為だ。彼女に足の速さで負けてしまった所為だ。如何してだろう。彼女はいつもやる気がなくて、すぐにさぼって……そんな人に如何して私が負けなくてはならないのだろうか。

解らない。

今日はまだ練習なので、公式の結果とはならないけれど、それでも、厭だ。何より、私自身がそれを良しとしない。私にとって走るということは、私が私である為の証明なのだ。

それを穢された。

溜息が出た。

放課後、日が傾いてきた頃。あと一本走ったら今日の練習も終わりという時だった。

周りにはもう誰もいない。顧問の先生が遠くの体育倉庫の中で片づけをしているのが見えた。橙色に染まるグラウンド。この光景が、たまらなく好きだ。夜が迫ってきて、冷たい風がふっと通り抜ける。

ふと気配を感じて振り返ったけれど、誰もいない。幽霊もいない。

でも、何かに見られている感じがする。普通は気がつかない程度の違和感。でも、私には解ってしまった。誰かが近くにいます。きよろきよろと見回してみると、朝礼台の横に黒いエナメルのパンプスが置いてあった。さっきまであんなもの、あったらどうか。誰かの忘れものだろうか。でも、ストラップシューズなんてものを、学校に履いてくる子がいるとは思えなかつた。

ずきっと頭の奥が痛んで、思わずしゃがみ込む。脳裏に何か映像が浮かんで消え、浮かんで消えた。懐かしい感じがした。

再び朝礼台に目を向けると、さっきの黒いパンプスがなくなっていた。誰かが取っていったにしては余程の早業だ。それどころか、グラウンドには私と、夕日が作る私の長い影以外に動くものはない。

ただの見間違えだろうか。頭痛もしたし、疲れているのかも知れない。

早めに帰ろうと思ったその時、後ろから私を呼ぶ声があった。遠い昔に聞いたことがあるような、そんな懐かしい音で。

「だいぶ楽しそうじゃない」

ボブカットの黒髪が風に揺れた。目の前にいたのは車椅子に座った少女だった。年は同じくらいだろうか。生気を感じられない真っ白な肌をしている。ブランケットで隠された足。その裾からは黒いエナメルのパンプスが顔を覗かせている。

小柄なその身体で、下から見上げられる。

「お久しぶりね、奈子」

すうっと細められた瞳が、私を射抜く。身体の芯から凍らせるような視線だ。この人、人間じゃない。直感がそう言っていた。こいつは、危険だ、と警告を発している。

「私のことを忘れちゃったの、奈子？」

可愛らしい眉を歪めて、車椅子の少女は不安げに私を見た。私はこの子と逢ったことがあるというのか。そう言えば、久しぶりと言われたような。ただ忘れていただけなのだろうか。

「貴女が今、二本の足で走れているのは、私のお陰だということも、覚えていないのね」

彼女のお陰？

いったい、どういうことだろうか。

小学校に上がって間もない頃だったのか。うっすらとしか思い出せない。ただ、その時には自分が歩いている記憶ははっきりとしている。記憶を段々と遡っていくと、小学校の入学式までは思い出せないのだ。親に尋ねたところ、入学式は車椅子で行ったそうだ。つまり、その時はまだ自分の足で歩くなんてことはできていなかったのだ。もっと昔は歩けなかつた。でも、それがある時に突然、奇跡でも起こったみたいに歩けるようになったらしい。

車椅子の少女は私に向けて小さな手を翳した。途端、頭の中にたくさんの情景が浮かんだ。痛い。頭痛がひどい。吐き気がする。目を瞑っても、何か映像が見える。見たくもないホラー映画を無理矢理見せられているような不快感。

これは、私の記憶だ。

目の前に現れた、車椅子の少女は残酷なまでに過去を語る。

「貴女がね、とても寂しそうだったから。こうして歩けるようにしてあげたわけ」

この少女が、私を歩けるようにしてくれた。

私には覚えがなかった。でも、霞が晴れていくように思い出が鮮明になっていく。

「貴女に、そんなことができるの」

「あら、失礼ね。できるわよ。私の足と貴女の足を交換するくらい、簡単なの。なんなら今すぐにでも、その大事な両足を返して貰っても構わないけど」

済ました声は、少しだけ怒気を孕んでいる。余裕を湛えた笑み。私は何も言えなくなる。

歩けなかった私。歩けるようになった私。どちらも本当のことで、それは私の過去として存在している。

今こうして私の目の前にいる少女は、隙がない。輪郭が他の幽霊に比べてはっきりしているのも、存在が強い証だ。

そんな彼女は、闇の如く黒い髪をそっと撫でて、口を開いた。

「まあでも、そろそろ返して貰わなくちゃ」

その言葉に頭の中が真っ白になる。返す。この足を、返す。

厭だ。

折角、私は歩くことができたのに。走ることができたのに。私の日常を、この車椅子の少女は簡単に壊すことができる。

如何したら良いのだろう。せめて、白鳥慧子に勝ってからでは駄目だろうか。いや、そうではない。如何にかしてこの足を失わなくて済む方法はないのだろうか。

「だって、そうじゃない。借りたものは返さなくちゃ。お母さんに習わなかったかしら」

言葉でいたぶるように、耳の中にごわごわとその声が残る。

気分が悪い。

「苦しそうね」

目を細めて、少女は笑った。じやりじやりと音を立てて、車椅子が近づいてくる。校庭の砂に捕らわれていても、ものともせずにするすると進んでくる。

愉しそうな、貌で。

嬉しそうな、声で。

「ふふ、その顔、もっと見せて頂戴」

すっと伸ばされたか細い指が、私の顎に触れる。ひんやりとして、冥界の冷気みたいな体温だ。後ずさりしたいのに、上手く足が動かなかった。

「もし貴女がその足を手放したくないのなら……」

「……如何したら、良いの」

酸素が恋しい。呼吸がしづらい。夕暮れの風は、こんなにも残酷に冷たかっただろうか。

「簡単よ……」

指が私から離れて、彼女は醜悪なまでに綺麗な笑顔で、

「誰かから奪えば良いのよ」

冷徹にそう告げた。

——誰かから奪えば良いのよ。

鼓膜に貼りついてしまって、車椅子の少女の声が頭を離れない。自分の部屋の布団に入って丸くなってみても、何処かから見られているような不安感があった。

彼女は何者なのだろう。それは解らないけれど、私を歩けるようにしてくれた。なんとかしてこのままでいたい。歩けなくなるのは、もう厭だ。でも、あの独特の存在感が、車椅子に座っているのに何故か見下ろされているような嫌悪

感が、私を萎縮させてしまう。

布団の隙間から、机の上に置いたナイフを見やる。真っ暗な部屋には明かりはないけれど、月に照らされたナイフが、妖しく輝いている。

車椅子の少女は、

「このナイフね。綺麗でしょう、装飾が素敵だと思わない？」

と、うっとり柄に魅入ったあと、私にナイフを手渡した。刃を握りしめて、私には柄を差し出した。私が驚いていると、

「このナイフはね、足しか切れないの。だから、素手で触っても大丈夫。抱っこして寝ることだってできるわ」

もう何も言えなかった。彼女の異様な空気が全身の水分を奪っていくみたいで、息が苦しかった。

彼女は、奪えと言った。誰からとは言わなかった。足なら何でも良いのだ。でも……。

誰でも良いからこそ、私は困っている。

いやそもそも、誰かの足を切り落とすなんてことが、できるのだろうか。

そんなこと、したくない。できることなら、誰かを傷つけず、そして私の足も現状のまま、というハッピーエンドはないものか。

無理だ。そう思ってしまう。

脳裏に車椅子の車輪がよぎる。少し錆びの浮いたボディがちらつく。厭だ。

私は彼女の言いなりになるしかないのだろうか。自分で決めた道を歩くことができないのだろうか。

「できないんだろうな……」

溜息と共に思わず言葉が漏れる。陰鬱な声が、私の包まった毛布の中で、ぐるぐると渦を巻く。

できない。できる筈がない。何故なら、今までだってそうだったのだから。私が自分の足で歩いていると思った道は、誰かに歩かされていたのだから。

自分で選んで歩いたと錯覚していただけだ。実際には、そこしか歩けなかったのだ。

## 足（3）

---

机に頬杖をついて、ナイフの表面を眺める。そこには陰鬱な私の顔が歪んで映りこんでいる。短く切った髪だけが、よく見えた。

記憶が戻って、はっきりと思い出した。私は生まれた頃から病弱で、そのくせ足が不自由だった。長いこと病院で生活していたし、自分の家で暮らせるようになったのはそれこそ小学校に上がる直前だった。

長い病院暮らしの中で幽霊を見かけることは日常茶飯事だった。看護師さんにそれを伝えても気味悪がられるだけだった。それでも、私の目には生きている人と分け隔てなく、死んでしまった人が映っていたのだ。

病院の中でたまに見かける同い年の女の子が死んでしまった時はひどいものだった。私にはまだその子が見えているのに、周りの大人たちはその女の子の死を悲しんでいる。病室の前を通りかかった私に、女の子の霊は優しく微笑んだのを覚えている。きっと、あの子は幸せだったのだ。そう思ってしまう笑顔だった。私はどうだろう、とふと考えた。私はこの年で死んでしまって、本当に笑って逝けるだろうか、と。あまり病院から出たことがないし、よく解らない、というのが本音だった。今にして思えば、感情が希薄だったのだ。何に対しても興味が沸かない。生きていいのかどうかすら、解らない。ただただ、車椅子の上で生活する私からは、感情というものは欠如していった。

病室の白は、私から様々なものを奪っていった。真っ白に心を塗り潰す。白は綺麗かも知れない。でも、本当に何も無い空っぽの心ほど、恐ろしいものはない。

そんなある日、私はある少女と出逢ったのだ。

定期健診で病院に来ていた時のこと。お母さんがお医者さんとお話しているので暇になり、私は車椅子ですすいと中庭に繰り出していた。

中庭はたくさんの植物が植えられていて、みんなの憩いの場となっていた。生憎の曇り空に押し潰されそうになりながらも、ぶらぶらと植物の間を縫っていく。

突然、後ろから声をかけられた。声の主は知らない人だった。肩まで伸ばした真っ黒の髪に、深い黒の瞳。年は若い。高校生くらいだろうか。男の子が着るような黒いジャケットに、ゆったりしたクリーム色のスカート。長い裾の先から、エナメルのパンプスの爪先が覗いている。上着についた金色のボタンが無数の目に見えて、少し怖い。

「ひとりで、お散歩かしら」

滑らかな声だった。まるでテレビの画面を撫でたような、つるつとした感じ。悪く言えば人間らしくない声だった。この人、幽霊かも。そう思った。

「散歩日和とは言えないけれどね」

彼女はそう言うと、何が楽しいのか高い声で笑った。

どなたですか。心の中に浮かんだ疑問は、彼女の瞳に吸い込まれてしまって上手く言葉にできない。

「その足」

「え」

彼女のほっそりした指の先には、私の足があった。動かない私の足。

「それ、動かないの」

「うん」

動かない。そうだ、動かないんだ。久しぶりに告げられた言葉だった。周りの人たちは私のことを気遣う余り、そんな当たり前のことを不躰に言わない。

「へえ……」

またもや、彼女は口元を曲げる。何が楽しいのだろうか。

まるで品定めでもするように、私の足に視線は注がれている。

やがて、彼女は口を開く。

「それ——」

ざあっと風が吹いた。綺麗な花びらが、辺りに舞う。翳っていた雲が、更に空を覆ったようだった。

私の髪と、彼女の髪が、ばさばさとなびく。

可愛らしい唇が、動く。

「――動くようにしてあげようか」

彼女はそう、告げた。

それ以来、私は歩けるようになった。ただ、如何して歩けるようになったのかはすっかり忘れていたのだった。それが彼女の力なのかは解らない。

でも、彼女のお陰で、私は歩くことができるようになった。走ることができるようになった。

今までなかった“私”という感覚を、私は走るということで手に入れた。

曖昧な記憶、歩けなかった過去、病院、幽霊の見える体質。そういった諸々の悩み事も、走っている時には忘れられた。地面の上を駆けている時だけ、私は私でいられたのだ。

私が私であるためには、走る必要があるのだ。

でも。

でも、それが奪われる。怖い。厭。厭なのだ。

確かにこの両足は、偽りのものかも知れない。私の本当の足は動かないのだから。

でも……。

走ることで私が見つけた私を、奪われる。それは……。それだけは、厭だ。

浮かぶのは今日の体育の授業。自分が自分であるために、常に誰よりも速く走らなければならない。なのに。なのに、あの子は。あの、白鳥慧子という少女は。私よりも、足が、速くて。おまけに、成績だって良い。少し前まではただのサボり魔だったのに。なんだというのだ。

考えれば考えるほど、悪いことばかり浮かぶ。私があの子に負けなければ、足を返してくれと言われなかったのではないか。そんなことは関係ない。心のどこか冷静な部分が必死に否定するけれど、私はそれを良しとしない。だって、だって。私があの子よりも速かったら。私が私であるために、誰よりもこの足を使いこなしていれば。もう手放したくないって、そう胸を張って言えたのではないか。違う。白鳥さんは悪くない。悪いのは、全部、全部、私なのだ。こんなことを考えてしまう私なのだ。もともとこの足は私ではないのだから。厭。違う。走りたい。歩きたい。この足で。借り物でも、それでも。私はまだ走っていたい。だったら……。

気づけば両目からはぼろぼろと玉のように涙が溢れていた。恐ろしい感情に、支配されて。

「白鳥……慧子……」

涙と一緒に毀れたのは、一人の名前。

白鳥慧子。

黒い髪の毛の揺れるのが、残像として見えた。

――誰かから奪えば良いのよ。

触り心地のなさそうな、あの声が頭の中に反響する。

あの子から、足を奪えば良いのだ。

白鳥さんの、あの足を。

机の上のナイフは、私の涙で輝いていた。その雫をそっと指でなぞって、

「白鳥さんの血で、濡らしてあげる」

鞆の中にそっとしまいこんだ。

## 足（４）

---

翌日。

睡眠不足の身体を引きずって学校へと通う。中学校へは自転車に乗って向かう。自分で走るのも好きだけれど、乗り物に乗って風を切るのも爽快だ。

眠い筈なのに、妙に頭はすっきりしていて。これから白鳥さんの足を切るんだと思うと、恐ろしさよりも妙に心が弾んでしまう。

どんな感じがするのだろうか。人の身体を切るというのは。

いつだったか、テレビドラマでリストカットという自分で手首を切る人が出ていたけど、正直、理解できなかった。如何して自分の身体を傷つけるのか。私には解らない。それはもともと私が歩けなかったからなのか。それとも、それとは関係なく理解できないだけなのか。どちらにせよ、私は一生リストカットなんてしないのだろうか、って思った。

リストカットをする人は、身体を切る感触を知っているのだろうか。

教室に着くと、すでに白鳥さんの姿があった。早く着きすぎたかも、と焦っていたけれど、予想以上にクラスには人がいて驚いた。

「あれ、奈子。今日は早いじゃん」

そう声をかけてきたのは北条桜、という女の子だ。

「あ、うん……おはよう」

桜は明るい。誰にも同じように接するから、人気がある。その横にはいつものように木下茜もいた。

「如何したの、元気ないね」

茜は小学生低学年みたいな身長をしている。いやもう小学生にしか見えない。

「あまり寝なくて」

寝不足なのは嘘じゃない。でも、それが原因ではない。勿論、そんなこと言えない。ちらと白鳥さんを見ると、思いつき目があった。しまった、と思って慌てて目を逸らす。逸らしてから、余計にばれてしまうじゃないか、と自己嫌悪。

「昨日の体育の時も、本調子じゃなかったみたいだし」

あっけらかんとした物言いの桜。その言葉が、心を揺さ振る。動揺してしまうのを、必死に抑えて、

「いやいや、そんな日もあるって」

「奈子ちゃん、何かあったら言ってね。力になるから」

小さい身体をぶんぶん動かして茜が言う。何をそんな大げさに、と思ったけれど、口には出さなかった。

気まずい雰囲気だから、一度教室から出る。ロッカーの荷物を取るそぶりで、窓の外を見やり一息つく。如何しよう。このままではいけない。白鳥さんのことばかり気になってしまって、普段の会話すらぎくしゃくしてしまう。

とにかく一端深呼吸だ。

すう、はあ、すう、はあ、と私がやっている、後ろから白鳥さんの声がした。

「謎深呼吸だねー」

「ふ、ぐ……っ」

勢いよく咳き込む私の背中を撫でて、

「ごめんごめん、そんなに驚かれるなんて」

悪びれもせずそう笑った。

なんでここに。そう言いかけた言葉が、彼女の言葉の前に出番を失った。

「何か、用があるんでしょ」

疑問ではない確認の問い。

全身からさあっと血の気が引くのが解る。ぎゅっと鞆を握る手に力が入る。如何して。如何してばれてしまったのだ。さっき彼女と目が合ったから？ それだってたまたまじゃないか、なのに、如何して……。

「答えないところを見ると凶星かな」

底意地の悪い笑みで、こっちを見てくる。やられた。はめられたのだ。彼女の口がゆっくりと動く。

「厭な感じがするの」

しかし、出てきた言葉は今までの態度とちぐはぐなものだった。

少し青ざめた表情の白鳥さん。何かに怯えているようにも見える。私が彼女の足を狙っていることまで、解ってしまったとでも言うのか。

「モッチーは……奈子ちゃんは、違うよね……何処にも、行かないよね」

迷子の小動物みたいな声で、そう言われた。何を言っているのか、解らない。彼女は何を恐れているのだろうか。

「な、何を、言って……」

抱きしめるように両手で支えた鞆には、あのナイフが入っている。今ここで、ナイフを取り出して白鳥さんの足を切つてしまえば……。

そうすれば、私はいつまでもこの足で歩いていられる。車椅子のあいつから、逃れることができる。

「奈子ちゃん」

そう言うと白鳥さんは私の手をぎゅっと握った。顔が近づく。息もかかるようなくらい接近して、彼女の大きな瞳がこちらを向く。鞆が床に落ちる。ナイフのぶつかる、鈍い音がした。

「何か、あるんでしょ」

如何してばれたのか、とかそんなことはもうどうでも良くなった。それだけ彼女の瞳には力があった。先の先を見越している。裏の裏を読んでいる。

「な、何かって……」

後ろに下がろうとしても、すぐにロッカーに背中をぶつけてしまう。逃げられない。如何してこんなにも白鳥さんが怖いのだろうか。全て見透かされているように感じるからだろうか。

床の上に転がった鞆を急いで拾い上げて、白鳥さんから逃げだすように走り出した。後ろから彼女の声が聞こえる。追いかけてこられたら、私に勝ち目はない。私よりも白鳥さんの方が、足が速いからだ。そのことを思い出して、視界が滲んだ。

無我夢中で走っていたら、気がついたらグラウンドに出ていた。体育倉庫の壁に背を預けてへたり込む。呼吸を整えるのに、少し時間がかかった。どうしよう。そればかりが頭の中に浮かぶ。このままじゃいけない。それは分かっているのに。

結局、駄目だった。

私には白鳥さんを傷つけることなんて、できなかった。

「馬鹿だね」

錆びついた車椅子の音と共に、あいつが姿を現した。

「簡単なことなのに、びびっちゃって、本当に使えないのね、貴女」

冷凍室から取り出したような冷たい視線が突き刺さる。

「できないよ……やっぱり、こんなこと……」

弱々しく、けれど正直にそう言った。如何しても、無理だ。誰かを傷つけるなんて、私にはできない。

「だったら、仕方ないわよね」

そう言うと、彼女は小さな手のひらを私に向けて、聞き覚えのない異国の言葉を紡いだ。それは単純な英単語の羅列にも聴こえたとし、懐かしい歌謡曲のようにも聴こえたとし、機械が通信に使う電波のようにも聴こえた。

一切理解できない私は、その音が途絶えても、やはりぼかんとするしかなかった。目の前の少女は、いったい何をしたのか。

何も起こらない、そう思い安心した途端、心臓が跳ねるように驚いた。

なんだ、これ。

「ちゃんと返して貰ったわ、私の足」

にやりと笑う彼女は悪魔にしか見えない。

初め、何も起こらないから彼女に近づこうと思った。

それから、笑う顔が怖くて、後ずさりしようと思った。

でも。

動かなかった。

「そ、んな……」

動かない。動かない。どう力を込めて良いのか、脳みそが忘れてしまったように。私の二本の足は地面から生えた柱みたいに、うんともすんとも言わない。

絶望に悲鳴を上げそうになった時、奇跡が起こった。

動いたのだ。

「え」

間抜けな声が口から出る。でも、それほど驚いたし、嬉しかったのだ。一瞬でも心の中を満たした絶望は、掻き消えていった。

返してしまった筈の足が、また私に戻ってきたのだ。

「な、何よ……う、動くじゃない。ほら、こうして、動く！ 歩けるじゃない！」

勝ち誇った笑みを向けると、車椅子の少女は腹を抱えて笑い出した。

「あっははははははははははははははは——！」

「な、なに……」

顎が外れてしまうくらいに笑っている。上品な顔が醜悪に歪む。

「貴女のその足、確かに動くね……でも——」

一端言葉を区切り、彼女は口元を拭った。だけど、すぐ笑いがこみ上げてくるみたいだった。

そして、言葉の続きを、冷徹に宣言した。

「——でも、それ。誰が動かしているのかな？」

「……え」

動く、私の足。動く、動いている。

ただ……。

「な、にこれ……」

振り絞るように、精一杯の声を出した。

「あはははははははははははは、おっかしい！」

両目を糸のように細めて、車椅子の少女が笑い転げる。私の足は動き続ける。止めようとしても、動き続ける。

「い、や……っ」

如何して。如何して。如何して如何して如何して如何して如何して如何して如何して——

「厭、厭あ！ 何これ！」

勝手に足が動く。私の意志に反して、動く。

「言ったでしょう。返して貰ったって」

心底楽しそうな声がする。

「ちゃあんと返して貰ったわ。貴女の足の所有権」

足の所有権。

それはつまり……。

「今、貴女の足を動かしているのは私。それだって、貸していたものを返して貰っただけよ。貴女に貸しておいた、所有権をね」

彼女の笑い声が響く中、私の足は勝手に動き続ける。ずんずんと、向かう先は学校の外。ここは高い丘の上に建てられた学校だ。その為、グラウンドの隅からは街が臨める場所がある。

「このまま柵を乗り越えてしまえば簡単に死ぬるけど、それだと面白みにかけるわよね」

私の横を涼しい顔でついてくる。如何しよう。如何すれば良いのだ。

「ね、ねえ、お願い。助けて。助けてよ！ こんなの、厭！ ねえ、お願いだから！」

「駄目よ。私、昨日教えてあげたわよね。誰かから奪うしか方法はないって。ナイフだって貸してあげたじゃない」

ナイフ。そうだ、鞆の中に、ナイフが。

でも、彼女とは距離があって武器が届きはしない。

「あら、そのナイフ、返してくれるの」

手に握ったナイフが、昨日とは違って厭に重い。足はずんずんと前に進む。傍から見れば、ただ歩いているだけなのだろう。でも、違う。私の足を動かしているのは、目の前の悪魔だ。

うすうす解ってはいたのだ。返さなくてはいけない足。誰かから奪えと言われた足。もう動かなくなる足。もともと動かなかった足。足、足、足。

毎朝、足にできる幽霊の手形を思い出す。足に気をつけろっていうことだったのだろうか。

私にとっての唯一の居場所から、どんどん遠ざかる。勝手に、踏み躪られていく。だったら……。

「こんな、足……！」

思いっきり、ナイフを太腿に突き立てた。鮮血と共に、目の前がちかちかと発光する。溜まらず口から叫び声が出た。でも、足は動くのをやめない。

「止まって、止まってよ！ 動くな、動くな動くな動くな！」

呪詛をぶつけて、ナイフを振りかぶり、足を切りつける。痛みで脳みそがおかしくなりそうだ。何も見えなくなる。

「馬鹿だね。そんなことしたら、痛いじゃない」

「でも！」

「なにかしら」

「自分で進む方向も決められないんじゃ、こんな足、いらない！」

「へえ」

力の限り怒鳴り、渾身の力でナイフを突き刺す。大地に十字架を立てるみたいに。深々と、刺す。

がくんと身体が崩れ落ちた。身体を支える力がなくなった。動くのに必要な筋肉がおかしくなってしまったのだ。

車椅子の少女は深く溜息をつく。

「……仕方ないなあ」

花卉が散った。そうとしか思えなかった。真っ黒なアゲハ蝶が飛び立つみたいに、彼女の身体は一枚ずつの花弁となって、消滅した。瞬きをする。両手でごしごしと目を擦る。目を開ける。そこには車椅子も黒髪の女の子もいない。私は街が一望できる崖の手前で倒れている。足からは血が出ていない。先ほどまでの激痛も、ついでのように血だらけだったナイフも消えていた。夢から覚めたみたいだった。厭な汗をかいている。

「なん、だったの……」

風が吹いた。チャイムの音が聞こえた。朝の SHR の始まる時間だった。

足音が聞こえたと思って振り返ると、そこには白鳥さんが立っていた。息を切らして、髪をぼさぼさにして。

「探したよ、モッチー……」

そう言うと、彼女はにへらと笑顔になる。安堵で腰が抜けてしまった。差し出された手を強く握り返して、私は起き上がる。

「もう、いきなり走り出したから心配したよ。いったい何があったのさ」

少しだけ怒った口調で、彼女は言った。

「なんでもないよ」

呟いて、私は額の汗を拭った。結局、さっきまでの悪夢はなんだったのだろう。白昼夢だろうか。それにしてもはやけにリアルで。まだどこかであの車椅子の少女が見ているのではないかと不安になる。

「ほら、急ごう。一時間目、始まっちゃう」

それでも、今はこの白鳥さんの笑顔で全て吹き飛ばしてしまう気がした。

再び差し出された小さな手に、私も手を差し伸べる。足を踏み出す。

その時、思ってしまった。思い出してしまった。気がついてしまった。

私のこの足を動かしているのは、誰なのだろうか。

足だけじゃない。腕や、口や、目や、表情。そういった、私の身体、全部。動かしているのは私の意志、の筈だ。

でも……。

勝手に足が動く、あの気味の悪い感触が蘇る。あれがたとえ夢だったのだとしても、脳みそが、身体が、心が憶えている。

私は本当に自分の意志で、歩いているの？

「如何したの？」

不思議そうな白鳥さん。差し出されたその白い手が、朝日に輝いて、私にはひどく憎らしいものに見えた。

六花 *snow*

雪の異称。雪の結晶が六角形であるところから。

## 血（1）

---

冬が嫌いだと彼女は言った。

「春も嫌い、夏も嫌い、秋も嫌い。冬はもっと嫌い」

霜柱を踏んでいくみたいに、ひとつひとつ指折り数えて、粉雪はそう言った。

「季節があると、不安になるの」

「如何して」

私の掠れた声は、雪の舞う空気に白く凍って消える。

「……終わっちゃうって、思うから」

長い睫毛を伏せて、粉雪は悲しそうに呟いた。その小さな言葉はワルツを踊るみたいに冬の空気に消えた。

「トンネルには必ず出口があるように、始まってしまったら終わりがあるの。新しい季節が始まるたびに、私はその終わりを想うの」

粉雪の吐く息は白く濁りはしなかった。体温が低い所為なのか。

ダッフルコートの手元をきゅっと押さえて、

「葉桜は——」

私の名前を、粉雪が呼んだ。なに、と返事をすると、すぐ目の前に彼女の顔があった。どこまでも白く、陶磁器のような肌。降り続く雪を少しだけ被った髪の毛。ふわふわした毛先が、肩口でカーテンのように靡く。

「葉桜は、冬は好き？」

黒真珠のような瞳が、じっと私を見上げる。

舞い落ちる雪の欠片が、私たちの間に降る。沈黙が積もる。

潤んだ瞳の粉雪の頬にそっと触れる。ひんやりとした感触が指先に伝わる。その頬が朱に染まるのを確認して、私は言った。

「冬は嫌いだよ」

粉雪の次にね。

「明日は雪かな」

ある日の晩、夕食のハンバーグを食べていると、横に座った粉雪が言った。背中にかかるくらいの黒髪を揺らして、

「今日、すごく寒い。明日は雪かな」

「食べながら喋らないの」

私の注意を聞いているのか聞いていないのか、いや、きっとこれは聞いていないのだけれど、彼女はしきりに口を動かしている。

雪だったら、学校お休みかもね、とお母さんの、粉雪に似ている声が賛同すると、彼女はぱあっと笑顔になる。

そんな期待をするだけ無駄だろうに。どうせ、朝になったら雪なんか積もってなくて、普段どおりに学校に行かなければならないのだ。

だったら、初めから期待なんてしない方が良く。期待はとても甘くて縋りたくなるけれど、裏切られた時、辛いから

。

「お母さんも、お仕事お休み？」

粉雪の甘ったるい声を聞きながら、ハンバーグに切れ目を入れる。ケチャップで味付けした、我が家特製のハンバーグだ。

お母さんの仕事は雪が降ったくらいではお休みにはならないらしい。電車が止まったら話は別なのだろうけど。ごめんね、と謝るお母さんに、粉雪は不満げに頷いた。

「粉雪、あんまり我儘言わないの」

「わがままじゃ、ないもん」

むっと頬を膨らませる粉雪。けれど、お母さんは、

「良いのよ、葉桜」

「でも……」

「良いの」

そうきっぱりと言った。なんだか、私が悪者みたいじゃないか。

「なるべく早く帰ってくるわ。お父さんの、命日だもんね」

そうだ、明日はお父さんの命日なのだ。

その言葉に、胸がぎゅうっと締め付けられる。残りのハンバーグを勢いよく胃に取めた。

「葉桜」

「なに」

お風呂から上がると、部屋の前に粉雪がいた。

「次、あんたの番だから。早く入っちゃいなよ」

そう言うと、粉雪はふるふると首を振った。いつまで経っても子供っぽい粉雪。同じ中学一年生とは思えない。

「話があるの」

けれど、今だけはちょっと真面目な顔。何か悩み事かな。私に言わないでお母さんに言えば良いのに。そう思っても、口には出さない。彼女にとって、血の繋がった家族は、この家にはいないのだから。

「入って」

部屋のドアを開いて、粉雪を招き入れる。彼女をここに入れるのは、いつ以来だろう。中学生になってからは初めてかも知れない。

「あのねっ」

「落ち着きなよ。そこ、座って良いから」

勢い込んで話し出す粉雪を制して、椅子を勧める。代わりに私はベッドに腰掛ける。身体が沈み込む感触が、今は少し不快だった。

それで思い出したわけではないけれど、中学校に上がる前にはもう粉雪のことが嫌いだった。彼女の性格がどうのこのじゃない。ただ、嫌い。同じ家の中に異物が入り込んでいると、そう思うようになってしまったのだ。

あるいは。

そこまで考えてひやっと心が冷たくなる。

「あのね、葉桜」

「な、なに」

「明日ね、もし雪で学校がお休みだったら……」

なんだ、またその話か。粉雪は学校嫌いではないと思っていたのだけど。

それとも、雪が降るということに浮かれているのか。彼女の精神年齢から鑑みれば、否定しきれない。

「二人で、夕ご飯を作ろうかな、って……」

はにかむ粉雪に、私は疑問符を浮かべるしかない。如何して、夕ご飯？ お昼じゃなくて？

「お母さん、いつもお仕事大変だから。その、お父さんの命日くらいは、楽させてあげようと思って」

粉雪が「お母さん」、「お父さん」と言うたびに、心をフォークで突かれているような不快感が込み上げる。粉雪の本当の両親はとっくに死んでしまっている。粉雪のお父さんは私の伯父に当たる。その妹が、私のお母さん。色々あって、結局、うちで粉雪の面倒を見ることになったのだ。

だから、彼女が私のお母さんとお父さんの話をするのを聞くだけで、厭な気分になる。粉雪のお母さんじゃない、って何度言っただけで迷ったことか。

そんなことを考えている自分に、また嫌気がさす。気持ち悪い。自分って、最悪だ。

本当は、粉雪のことが嫌いだなんて、嘘なのかも知れない。彼女を厭だっけ感じてしまうこの気持ち、私自身が嫌いなんじゃないのかって、最近気づいた。厭だな。

「ね、良いアイデアだと思わない、葉桜？」

目をきらきらさせている粉雪は、私のことをじっと見つめる。その無垢な視線に、私は耐えられない。心の奥底のどろどろとした黒い部分を見透かされてしまっているようで、怖い。

「うん、そうだね」

生返事でそう返す。確かにそれは素敵なことだと思う。

「やった。じゃあ、明日雪がたくさん降りますように。そして、お母さんにめいっぱい喜んで貰えますように」

胸の前で両手を組んで目を閉じる粉雪に合わせて、私も同じ格好をとる。目をぎゅっと閉じて、瞼の裏側を見つめて、彼女の願いとは全然違うことを妄想する。

——お母さんが、私だけのものになりますように。

## 血（2）

---

翌日、寒さで目が覚めた。カーテンを開けると、外の景色は真っ白だった。

「雪、降ったんだ……」

そうひとりごちて、ひとつくしゃみをした。

学校は休みになるのだろうか。昨日の粉雪の言葉が蘇る。

——二人で、夕ご飯を作ろうかな、って……。

お母さんにはとても良いプレゼントになるだろう。メニューを考えなくちゃ。冷蔵庫の中身を確認してからでも良いかな。

知らず、粉雪の発言に賛同して気持ちが高ぶっている私がいた。どうせ雪なんて積もらない、学校は休みにならない、なんて思っていたのに。いざ目の前に純白の街並みを見せ付けられると、否が応でも期待してしまう。

お母さんの作った朝ご飯を食べていると、電話が鳴った。連絡網だ。

『もしもし、戸塚といますが、名雪さんのお宅でしょうか』

受話器からは同じクラスの戸塚さんの声がした。いつもと違って緊張して上擦っている。誰が出るか解らないから、電話はあまり好きじゃない。息継ぎのタイミングが難しい。

「あ、私。葉桜」

『なんだ、葉桜か。おはよう』

ほっとしたのか、戸塚さんはいつもの口調に戻った。

『連絡網でね、今日、学校はお休みだって。雪、これから強くなるらしいから』

「うん、解った。ありがとね」

『……なんか、鼻声。大丈夫なの』

「え、そうかな」

『そうだよ』

「朝、寒かったからかも」

『どうせ寝相が悪くて布団から出ちゃってるんでしょう』

「そんな子供みたいなこと……」

あるけど。

『ま、今日は外に出ないで早くその風邪、治しなさいよね』

「うん、ありがと」

窓の外をちらと見ると、白い羽毛のような雪が、ひらひらと舞っていた。これからひどくなるのが、嘘みみたいな美しさだった。

「今日、学校お休み」

朝ご飯を終えた粉雪が、ソファに転がっている。

「いくら休みだからって、パジャマくらい着替えなさいよ」

淡いピンク色をしたパジャマは、ひどく子供っぽいので、粉雪には似合っているのだけど。

お母さんはいつも通り仕事があるので、出かけていった。家の中には私と粉雪だけ。テレビのワイドショーが各地の雪の景色を映している。普段はこの時間にテレビなんて見られないので、新鮮だ。

「夕ご飯どうしよっか」

ソファの上でクッションに埋もれた粉雪が、ぼんやりと天井を見上げて呟く。そうだった。お母さんへのプレゼント

。

「その前にお昼のことも考えないといけないんだけど」

勿論、夜のこともあるのだけど、さし当たってはお昼だ。あるもので済ませて、とお母さんは言っていたから、自分た

ちで作らないといけない。

「冷蔵庫にあるもので作らないといけないんだけど……」

「夜の分の材料がなくなっちゃうよ」

「買いに行くしかないね」

「これから雪、ひどくなるんでしょう？」

そうだった。だったら早めに行かなければ。今から行けば、開店時間ぴったりくらいだし。

「それよりもまず、何を作るか決めないと」

「葉桜、それはちょっと違うよ」

上半身だけ起き上がった粉雪が、いっそう真面目な顔で私を見る。ぴんと人差し指を立てて、

「何が作れるか、だよ」

「ああ、そうね」

料理の本もついでに買ってこようと胸に誓った。

外は家の中の何十倍も寒い。風が出てきて、目の前があまり見えない。私も粉雪も同じようにコートと手袋とマフラーで完全防備。粉雪のピンク色のマフラーが、生きているみたいに動く。

「うひゃー！」

一人楽しそうな粉雪は、吹雪の中でじたばたしている。走ったら転ぶぞ。

「わぷっ」

転んだ。

「ああ、もう。何やってんのよ」

駆け寄って手を差し伸べる。灰色のダッフルコートはいよいよ雪まみれで、野兎にしか見えない。

ひんやりとした粉雪の手を握って、抱き起こす。

「雪って、冷たいね」

ぶるぶると頭を振って、雪を払いながらしみじみ呟く。それはそうだろう。氷なのだから。

「冬を目で見えるようにしたかったから、雪が生まれたんだって」

「なにそれ」

「こないだ本で読んだの」

「ふーん」

曖昧な返事しか出せない。冬を目で見えるようにして、誰が嬉しいのか。私にはそれが解らない。だったら、もっと別の目に見えないものを見てみたい。例えば、愛情とか友情とか。そういった綺麗な言葉で表現されるものを。

「だからね、雪がこんなに積もっているとなんだか嬉しいんだ」

粉雪は笑って、鼻水を啜る。私の風邪が移ったのだろうか。彼女の可愛らしい鼻のてっぺんはほんのり赤く染まっている。

「普段見えないものが見えるのは、嬉しい」

そう言って粉雪は空を仰ぐ。私もつられて上を向く。ねずみ色の空からは次から次へと雪が降りてくる。それは本当に冬が形を得て、落ちてくるみたいで。

「粉雪ってさ、冬が好きなの？」

そんな質問を試みる。声を出すと、口の中に雪が入ってきてひんやりする。舌の上ですぐに溶けてしまう冬の欠片。

粉雪を見やると、目が合った。くりくりした黒い双眸が、白い肌に映える。

「嫌いだよ」

あまりにも、あっけなく。

冬が嫌いだと彼女は言った。

## 血（3）

---

冬は寒いから苦手。

夏は暑いから苦手。

春は花粉が飛ぶから大嫌い。

秋は、好きだ。涼しいから。

一年のうちに季節というものがない国もあるそうだ。日本は四季がはっきりしている。私は秋だけの国に生まれたかったなあ、と降り続く雪を見上げて考えた。

店内にほどよく効いた暖房のお陰で、窓の外の雪を見ても寒さなど感じない。

目についた料理の本を手にとって、私はそれでもページに映ったハンバーグを見てもなしにぼんやりとする。隣でしゃがみこんで本を物色している粉雪が少しだけ恥ずかしく思えても、今は許そうと思ってしまう。

「葉桜あ」

本が平積みされている台に顎を乗せた粉雪が、やる気のない声で私を呼ぶ。

「なに」

「いいの見つかった？」

「うーん」

あまり真剣に考えていなかった手前、咄嗟の返事に窮してしまう。

たまたま開いていたページには美味しそうなハンバーグの写真が一枚。材料と手順が載っているシンプルな本だけど、初心者には解りやすい気もする。なにより、

「ハンバーグ」

「お」

「いつもお母さんに作って貰っているから。私たちのハンバーグも食べて貰いたいよね」

両目を輝かせた粉雪が立ち上がり、ぐっと身体を寄せてページを覗き見る。彼女の甘い匂いがして、雪で湿った髪の毛の先が揺れるのを感じた。

「あ、でも、昨日もハンバーグだったから、お母さん嫌がらないかな」

「いいじゃん、いいじゃん。今日は私たちで作るんだから、大丈夫だよっ」

そう言われると、自分でもなんだか名案のように思えてくるのだから、私は本当に単純だ。

早速その料理の本を買い、お店を後にする。とりあえず、スーパーに向かえば良いだろう。お母さんといつも行くイゼキマーケットを目指す。私の後ろを、本屋さんの紙袋を大事そうに胸に抱いた粉雪がとことことついてくる。

「次はどこ行くのー」

後ろを振り返ると、だいぶ彼女との距離があいてしまっていた。真っ白な雪を孕んだ冷たい風が吹く。

粉雪が目を擦りながら、

「イゼキ？」

「そう。材料、買わなくちゃ」

家に帰る向きと少し違ったから、察しがついたのだろう。

少しだけゆっくりとしたペースで歩いてみると、粉雪と肩が並んだ。なんだかんだで、彼女が隣にいると安心するのだ。やっぱり、私は単純だ。

「雪が降っていると、綺麗だよね」

ふとそんな言葉が口を突いて出た。なんだか、こんなことを言うのは本来なら恥ずかしいのだけど、今日は特別な気がした。雪が降っていて学校がお休みで、そして朝早くから粉雪と出かけている。

「綺麗、だよね」

マフラーにすっぽりと顔を埋めていた粉雪のくぐもった声が、雪と共に降る。

「ねえ、葉桜。人が見たら死んでしまう絵って、何だと思う？」

唐突に。雪が降り続いているところに、いきなり槍でも降ってくるかのように。粉雪の冷えた言葉。

冷たい空気は縮まってしまうらしい。反対に暖かい空気は膨張するそうだ。粉雪の言葉は前者。ひどく冷たい感じがするのだ。それ故に、普通は会話が広がりづらい。縮こまってしまうのだった。

でも。

「呪いの絵ってこと？」

不意の質問に、こちらも疑問符で返す。私がこうやって返事をしてあげれば、暖かくなるのではないか。会話が膨らむのではないか。目には見えない“言葉”というものが寒さに震えないように願った。

閑話休題。

呪いの絵と答えたのは、まったく無意識のうちだったのだけど、的を射ているようにも思えた。見たら死ぬということ、よっぽどの日くつきだ。作者が絵を描いている時に亡くなったとか、そんな感じの。未完のままの絵が心残りで、その絵を見た人たちを祟る。ありきたりなホラー映画にありそうだ。

「呪い、とはちょっと違うかな」

しかし、粉雪は可愛らしく小首を傾げた。目元が笑っていない。そのアンバランスさが、少しだけ怖い。いつも以上に白い彼女の頬は、真っ白なキャンバスのように、色づくのを待っている。

「その絵を見るとね、みんな死んでしまうの……」

粉雪は睫毛を伏せて、鎮魂歌でも聴くように、唇だけ動かした。

「その絵のあまりの美しさに」

美しさで人が殺せるのだろうか。

「そんなことって」

「勿論、例え話だよ。でも、世界で一番美しい絵を見たら、私は死んじゃうと思うんだ」

「如何して？ もうこれ以上綺麗なものに出逢えないって、不安になるから？」

「ううん、違うよ」

首を横に振る粉雪に、私は尋ねる。

「じゃあ、何よ」

「自分の醜さに気がつくからかも、ね」

そう言って微笑んだ粉雪は、まるで一枚の絵のように美しかった。

「もうね、きっと……そう」

その声は音楽の授業のようだった。歌い始め。悲しい曲。旋律。ピアノの音。そういったイメージの奔流が頭に流れ込んでくる。

「もう、死んでも良いかなって、そう思えるんだと思うの」

粉雪は笑っている。こんな笑顔で死ぬことができるのなら、それは幸福だ。

「だけどそれは『死にたい』じゃないの。『生きていたくない』という否定形で語られるべきなの」

彼女の言葉は時折、難解だ。誰が書いたか判らない詩集のページをばらばらにして、繋ぎ合わせたものを読まされている気分になる。

死にたい、という欲望とは違う。生きていたくない、という諦めに似た、世界を、自分を、否定する気持ち。言葉でうまくは言えない。言ってしまったらその場で脆く崩れ去ってしまうだろう。そういった、説明のつかない気持ちが、私の中で渦巻いていた。

## 血（４）

---

イゼキマーケットは私の家から歩いて十分のところにあるスーパーマーケットだ。普段は自転車で行くけれど、今日は雪だから歩く。粉雪の少し不思議な話を聴いているとこっちがおかしくなりそうだった。彼女と同じ家に暮らしてから数年が経つけど、未だにそこに慣れることができないでいた。

イゼキの中はほど良い暖房が効いていて、外の寒さで冷えた指先をそっと包み込んでくれた。隣の粉雪も両手に息を吹きかけている。

雪の日ということもあって、店内の人は少ない。

野菜売り場を通りかかると、クラスメイトの姿があった。

上城光。

「あ」

彼女は短い声を出して私たちを見た。

「あー、光ちゃん」

粉雪がそう言い、私も彼女の名を呼んだ。上城さんも合点がいったようで、はにかんで控えめに手を振った。

「雪すごいね、今日」

「う、うん」

こくこく必死に頷く上城さん。彼女は教室の中でもあまり話さない。成本さんと一緒にいるように思うのは、確か小学校が一緒だからだと聞いた。中学校に入ってそろそろ一年が終わるわけだけれど、そこまで仲良くなれた訳じゃないのが悲しい。

「名雪さんたちもお母さんのお手伝い？」

上城さんの言葉に彼女の背後に視線をやると、お母さんらしき人が立っていた。こちらをじっと見つめている。肩よりも少し長く伸びた髪の毛が、上城さんをそのまま大人にしたような感じがして面白い。

「ううん、お母さんはお仕事」

あ、と声になる前の音を口から発した上城さんはそのまま黙り込んでしまう。それに気づかずに粉雪はにこにこしている。

「気にしないで、上城さん」

そう言ってみても、彼女の顔色は曇ったままだ。お母さんと一緒に買い物に来ていることが、私たちに罪悪感でもあったのかも知れない。

その時、横から私たち以外の声があった。

「あらあ、名雪さんとこの！」

それは昔から仲良くして貰っている、近所に住む太田さんだ。まんまるな身体を横に揺らして歩く姿は、今も昔も変わっていない。

「葉桜ちゃん、久しぶりじゃないの……お友達？」

太田さんの優しげな瞳が、上城さんに向けられる。

友達。

上城さんとは、どうなのだろう。

粉雪はすかさず笑顔で、友達です、なんて答えているけれど。私にはそうすることができなかった。友達って、一体どうなれば友達なのだろうか。一緒にクラスにいただけで友達？ 休み時間に昨日見たドラマの話をすれば友達？ その基準が、私にはよく分からない。友達か、と聞かれても返事に困ってしまう。仲が悪いわけじゃないけれど、友達かどうかは判りません、というのが正直な答えだ。

「このところ全然逢わないんだもの……お母さん、何かあったの？」

「……？」

粉雪は可愛らしく首を傾げるだけだ。たまたま太田さんと逢わない時期が続いているだけだろう。毎日イゼキに来ているわけでもないんだし。

「まあ、違うなら良いのよ」

そう言って買い物かごに商品を詰め込みながら、太田さんは去って行った。久しぶりに会ったからもっと話したいこともあったのだろう。粉雪は太田さんの背中をじっと見つめていた。上城さんもお母さんに連れられて去っていった。粉雪と二人になって、本来の目的を思い出す。ハンバーグの材料を買わなくてはいけないのだ。

店内を二人、肩を並べて歩く。歩調は少し、粉雪の方が私よりも速い。ふと彼女が振り返って口を開く。

「ねえ、葉桜」

もういい加減に慣れた粉雪の言動。小さな唇が動いて、

「葉桜は、パズルの最後のピースがなかったら、どうする？」

聞き慣れた筈の粉雪の音が、まるで脳を直接接触されるような、ずっと私の中に入り込んでくるような音として聞こえる。

パズルが完成する、その最後の時に、あと一ピースだけが足りない。そんな時、私はどうするだろうか。目を瞑ってその光景を想像する。パズルは完成したも同然だ。きっと少し離れてみればピースが欠けていることに気が付かないだろう。そのパズルが完成していないことを知っているのは、世界で自分だけ。他の人からすればパズルは完成しているように見えてしまう。錯覚だ。飾られた一枚の絵として見てしまう。近づいて、じっと目を凝らせば一箇所だけぼっかり穴が開いているのに。

「私は、きっと、そのまま」

「そのまま？」

粉雪は不思議、といった顔でこちらを窺う。

「そう。だってそのパズルはもう完成してるようなものどもの。私が言わなければ、誰もそれが未完成だなんて気づきはしない」

うっすらと笑う粉雪の表情は読めない。

「私はね、葉桜。もし最後のピースが足りなかったら、きっとパズルを壊してしまう。また最初からやり直そうとする、と思う」

体が震えている。

「粉雪、寒いの？」

「ううん、そうじゃないよ。ただね、少し怖い」

「怖い……？」

いったい何が。

そう言おうとした私の手を取り、粉雪はレジへと急ごうとする。

「葉桜、早くおうちに帰ろう。雪、ひどくなるかもだし」

少し前の青ざめた顔から一変して、いつもの粉雪だった。

## 血（5）

---

お昼はパスタを茹でて食べた。粉雪の好きなミートスパゲティ。私はあまり好きじゃないのだけれど、そこは我慢する。私の方が年齢的にはお姉さんなのだ。数か月の差だけれど。

これはきっと小学校四年生の時に、粉雪が家に来てから変わらない。彼女に無理をさせてはいけないと、子供ながらに思った私が出たのだ。我慢するのは私。粉雪は我慢しなくて良い。私の家族になる為に頑張っているんだから。

それがいつの間にか、重荷になっていたんだろう。辛かった。どんどん家族になっていく粉雪が、妬ましかった。お母さんと楽しそうに話す粉雪が、憎かった。辛かった。苦しかった。

如何して、今になってこんなことを思い出しているのだろうか。

口の周りをソースで汚した粉雪を見て、ぼんやりとそんなことを考える。

食べ終わって食器を洗って、午後は特にやることもない。粉雪はテレビの時代劇なんか眺めて笑っているし、私はその横で本を読む。平和だなんて思う。外はいよいよ強くなった雪が舞っている。お母さん、ちゃんと帰って来られるのかな。

。

「ねえ」

粉雪が突然口を開いた。なに、と本から顔を上げて返事をする。

『どうして人は言葉を持ったのだろうか？ 心が見えにくくなる』

そんな歌を、粉雪は口ずさんで、

「どうして、言葉が生まれたんだと思う？」

眠たげな瞳で、私に問いかける。目の横がうっすら光っているのは、欠伸をした所為だろう。

「この歌ね、女の人が歌ってるんだけど、心が見えにくくなるからって歌ってるの」

言葉は便利だ。自分の考えを相手に伝えるにはそれが一番手っ取り早いように思える。

「自分の本当の気持ちを、隠すためかもね」

私はそう言ってやる。段々と粉雪との会話にも慣れてきたのだ。

言葉を持ったことで心が見えにくくなる。それはもしかすると、心が見えにくくするために言葉を持ったとも言える

。

「そうかもね」

満足そうに頷く粉雪。

それっきり会話も続かず、時間だけが過ぎていった。外が暗くなり始めた。

夜。

包丁を持つことになったのは私だった。おっとりした粉雪に刃物を扱わせたくない私の気持ちと、やる気はあっても料理はてんでダメな粉雪本人の気持ちが合致したからだ。

銀色の刃の表面に、私の顔が少し伸びて映る。ざくざくと玉ねぎを細かく刻んでいく。ざくざく、それは切られていく玉ねぎの悲鳴みたいで。悲しくても泣けない玉ねぎの代わりに、私はぼろぼろ涙を零しながら下ごしらえをしていく

。

霞んだ目を擦らなかつたのがいけなかつた。歪んだ視界の中で、はっきりとした色が見えた。

赤。

痛みはほぼ同時にやってきた。

「……っ！」

包丁を思わず落としてしまって、刻んでいた玉ねぎの山に落下する。その音を聞いたのか背後から粉雪の駆け寄ってくる足音がした。

「大丈夫？」

身を乗り出すようにして、可愛らしい眉にしわを寄せている。私は人差し指を押さえながら、

「痛いよ」

蛇口をひねって、傷口を洗い流す。それほど傷は深くないみたいだ。

見せて、と言って粉雪の二つの瞳が迫る。そうしている間にも、指の表面にぷっくりと赤い雫が湧き出る。

「舐めてあげるね」

粉雪は私の手を掴むと、人差し指をその小さな口に咥えた。咄嗟のことで頭が状況に追いつけていない私を放って、彼女は傷口を舐める。

「玉ねぎみたいな味する」

「だって、切ってたし」

彼女の舌が動くたびに、まるで私の身体の一部が粉雪に食べられているようで、ひどく不快になる。こんなの絆創膏を貼っておけば治る。粉雪は大げさなのだ。

「血の味、もする」

いつもののんびりした雰囲気はなくなっていた。

「粉雪？」

「え？」

瞳に光の戻った粉雪が、きょとんとして私の顔を見る。

「も、もういいから。大丈夫、だから」

「え、あ、そっか」

すっかり血を吸われた私の人差し指。外気に触れてひんやりする。背筋にぞくっと得体の知れない何かが這い上がった。

「どうしょ、料理」

「やるよ。こんなの絆創膏でも貼ればへっちゃらだし」

私は救急箱を探すためにリビングへと向かう。背後で粉雪がまじまじと、俎の上の包丁を見つめている気がして少し厭になった。

人間の血の色が赤いのは如何してなのかな。

隣に立って、料理の本を読みながら粉雪がぼそっと呟いた。

「赤血球が赤いから？」

「葉桜は夢がない」

「別に、なくて良いし」

血の色が青かったら怖い。赤だと怖くない。如何してなのだろう。脳裏に過ぎる記憶。血の匂いだ。

「ねえ、葉桜」

粉雪の声に我に返る。私は何を思い出していた？

「血の絵を塗る時に、何色で塗れば良いと思う？」

「赤じゃないの」

それとも少し時間が絶ったものなら茶色、褐色、黒色、といった具合に塗り分けるのだろうか。

「ある漫画家はね、血の色を塗る時に自分で指を切って、そこから出た血で塗ったんだって」

血の色を塗るのに、血を使う。

狂気じみたその発想に、しかし粉雪は酔いしれてもいるようで。

「素敵」

私の血の味でも思い出しているのか、彼女は料理の本に頬を埋めて囁いた。

「葉桜は人が死んだら何処に行くと思う？」

粉雪のいつもの声がある。如何して？ と彼女は問い続ける。

彼女にとって、この世は美しすぎるのかも知れない。粉雪の純真な心は、この世界で生きていくには摩擦が大きす

ぎる。

「天国か、地獄？」

私はそんな粉雪のひんやりとした心の端っこに、そっと触れてみたくて、こうやって手を伸ばすのだった。

「如何して天国と地獄なのかな。他の場所に行ける、って考えないのかな」

「他の場所？」

「うん」

こくりと頷く粉雪。黒い髪の毛がさらりと揺れるのを眺める。

「ただ、そこが何処かのかは解らないよ。でも、その何処かはドコカであって、普段は決して行けないような場所なの」

そうでなくちゃダメなの。

粉雪は告げる。

私が箸でハンバーグをひっくり返すのを、彼女は興味深そうに見つめる。

「天国と地獄はこんなに近くにあるのに」

こんがり焼けたハンバーグの表面。裏側はまだ生焼けだ。そういった二元論。

「普段は行けない場所に、死んだら行ける……粉雪の言いたいことはそういうこと？」

うん、と彼女は首を縦に振る。ふいに背中に吐息を感じた。彼女が後ろから抱きついてきたのだ。細い腕が、私のお腹の前に回されて、ぐるっと私を取り囲む輪を作る。

私は粉雪が嫌いだ。

血の繋がらない、妹のような存在。

でも今は、彼女に触られているということがひどく安心する。

背中に伝わる、粉雪の心臓の音。それが私の胸の音と、似ているからだ。

「もうすぐできるよ、粉雪」

いつしか私の声音は優しいものになっていた。自分でも解る。一日、粉雪の不思議な会話を通して、彼女の中にあるものに、もっと触れてみたい、と思えるようになった。

「お母さん、もうすぐ帰ってくるかな」

粉雪が「お母さん」と呼ぶその声にも、私は厭な気持ちにはならない。同じ家の中で、血の繋がっていない粉雪。彼女が血も繋がらないお母さんを「お母さん」と呼ぶのに、どれだけの苦痛と、勇気が必要だったのだろうか。私には、きっと一生解る筈もない。でも、解らないからこそ、私たちは会話を交わす。互いの胸の内を、心の底に沈んでしまった、大切なものを、そっと掬い上げて相手に見せる。それは本当に怖いことだし、勇気がいることだけれど、人間っていうのはそういうものなのだと思う。そうやって私たちは関わりあっていくんだ。私たちの血を、後の世代に残していくんだ。

「ハンバーグ、できた？」

「うん、完成」

粉雪の満面の笑みを見れば、わざわざ確かめなくても完成度が解った。



「こ、なゆ……き……」

うっすら目を開けて、部屋の中を見回す。

いた。残酷なほど近くに、粉雪はいた。そう、「いた」。

綺麗な顔は両目をぴったりと閉じ、雪のように白い頬は大理石のように冷えている。胸から溢れ出た血はとうに固まっていて、今はもう茶色いチョコレートに浸かった後みたいに汚れている。床も同じだ。粉雪の血で染まっている。

私はたまたまトイレに駆け込むと、さっき口に入れたハンバーグを吐いた。厭な気持ちまで、絶望的な現実まで、水に流せたらと、胃液と涙混じりの汚水を便器に流した。

「嘘だ」

信じられない。いつもの部屋には粉雪と、お母さんがいた。いた？ いや、正確にはいるけど、いないのだ。彼女たちは、死んでいた。血だらけで、けれど顔だけは、綺麗な眠り顔で。

なんで。如何して。如何してお母さんと、粉雪が。こんな、こんな。

はっきりしない頭で、よろよろと部屋に戻る。さっきと変わらない光景。お母さんと、粉雪が床に転がっている。むわっとする、血の匂い。改めて意識をすると、また吐きそうになる。血の匂い。私が慣れてしまった匂いだった。

あの日、粉雪は先に帰ってしまった。だから私一人で学校からの帰り道を歩いた。秋だった。夕暮れ。カラスの鳴き声。涼しい風。舞う落ち葉。本当に秋だった。帰り道、長い影。家に着くと、鍵が開いている。お母さんと、粉雪が、いる。それはいつもの光景。玄関にある靴が、きちんと並んでいないことに違和感を覚えて。靴を脱ぐ。しょうがないなあ、と溜息を吐きながら、散らばった靴を揃える。家に上がる。廊下を歩く。微かに聞こえるテレビの音。声は聞こえない。おかしいな。いつもならお母さんや粉雪の声がするのに。胸がざわざわした。厭な予感。こめかみの当たりがぴりぴりと痛んだ。リビングの扉を開ける。開けた。途端、漏れてきたのは、異臭だった。なんだろう、この匂いは。まるで……。そこまで考えて、背筋が凍った。急いで扉を開ける。開けてから、私は後悔した。部屋の中には……。

記憶の中の部屋は、今もこうして、私の目の前にそっくりそのまま残っていた。

二つ分の死体が眠る部屋。

ここで、私は、今まで何をしてきたのだ。普通に生活していたじゃないか。嘘だ。嘘だと信じたい。こんなの現実じゃない。悪い夢だ。夢なんだ。唇を噛む。痛い。包丁で指を切った時のことを思い出す。痛かった。痛かったんだ。

夢じゃ、なかったんだ。厭だ。厭、厭。

ぼん、と。肩に触れる感触。懐かしい、匂い。そこにいたのは粉雪だった。

「葉桜」

「粉雪」

如何して。そう思ったけど、なんだかほっとして涙が溢れてきてしまって、その後が続かなかった。

「ほら、葉桜、ご飯が冷めちゃうわ。貴女の大好きなハンバーグなのよ」

テーブルの上に、ハンバーグ。湯気を立てていて、とても美味しそうだ。お母さんのハンバーグだ。席につくと、食事が始まる。

粉雪の声がする。

「明日は雪かな」

窓の外はすっかり夜だ。テレビのニュース番組では明日の天気予報が流れている。きっと、雪が降る。

「食べながら喋らないの」

私の注意を聞いているのか、聞いていないのか。いや、きっとこれは聞いていない。粉雪の口は可愛らしく咀嚼を続ける。

お母さんの作ったハンバーグ。私が作ってもこんなに美味しくはできない。お母さんの自慢料理がこのハンバーグなのだ。だから、私が作ったものよりも……。

私が、作った……？

「雪だったら、学校お休みかもね」

とお母さんの声。粉雪に似ている声だ。

「お母さんも、お仕事お休み？」

粉雪の甘ったるい声を聞きながら、私はふと押し寄せた不安の原因を確かめようとする。

「ごめんね、お母さん、明日もきつとお仕事なの」

「そんなあ」

私の心の内を知らない二人は、おしゃべりを続けている。なんだろう。この感覚は。今、同じテーブルを囲んでいるのに、粉雪とお母さんがひどく遠い存在に感じてしまう。

「なるべく早く帰ってくるわ。お父さんの、命日だもんね」

そうだ、明日はお父さんの命日なのだ。

その言葉に、胸がぎゅうっと締め付けられる。

明日、雪は降るのだろうか。もしそうなったら、私は粉雪と二人で、家で過ごすしかないのだ。

粉雪はにんまりと、心底楽しそうな笑みを浮かべて、

「葉桜と一緒に、おうちでお留守番だね」

そう言った。

クオリア *qualia*

感覚的・主観的な経験に基づく独特の質感。

夜になると不安で。

星のない空はいつそう不安。

携帯電話のディスプレイには、送れなかったメールがうっすらと光を灯して、こっちを見ている。

——なにやってるんだろう、私。

いつから好きになっていたのか。もうそんなこと分からない。分かったところで如何なるわけでもない。

気がついた時には、好きだった。

今日も送ることのできなかつた、思いを綴ったメール。本当は直接告白をしたいけれど、なかなかタイミングが掴めない。

体に巻きつけた布団が、ずっしりと重みを増してくる。夜の暗さが染み込んだみたいに、重い。

もしも、この想いを伝えることができたなら。

私は毎日そのことを夢想する。そう、伝えられるだけで良い。きっと、私は、それで満足。やり遂げたって気持ちになる。

——でも。

できない。もどかしい。

溜息をひとつつくと、途端に眠くなって、いつの間にか夢を見ていた。夢の中ですら、あの人には逢えなかつた。

福内天莉（ふくうちあまり）は長い黒髪を、後ろでひとつに結っている。近くにいるだけで彼女の甘い香りが漂ってきて、花畑で寝転んでいる気持ちになる。

彼女の話す言葉はいつも何処か遠くを見ている。地に足がついていない。それこそ花畑で散歩をしているかのようだ。言葉がじゃれあっているような、そんな感覚。イメージでしか成立しないようなものを、天莉は音に乗せて、言葉として操っていた。

「未揺」

天莉の声が、私を呼ぶ。

それだけで、私は幸せ。

「これ見て、未揺」

彼女が見せてきたのは、一枚の絵だつた。ルーズリーフに描かれただけの、絵。恐らくさっきの社会の授業中に描いたのだろう。

その絵は、一人の女の子だつた。シャーペンで書いただけなのに、天莉の絵は上手だつた。天

莉は特に人物を描くのが得意だ。

「この子ね、あすこの窓のところにいたのよ。それでね、ちょうどあのあたり、うん、長谷川さんが座っているあたりを見ていたの」

この子、というのは彼女の描いた絵の子だ。おかつぱ頭に大きな瞳、小さめの鼻に、可愛らしい眉。

「変よね、窓の外だもの。ここ、二階でしょう」

「そうだね」

「それにね、ずうっと動かないのよ。だからね、絵を描ける暇もあったの」

授業は如何した、と言いたくなる気持ちを我慢して、

「そうなんだ」

そう返事をする。

これが彼女とのいつものやり取り。天莉は人には見えないものが見える。一般的な言葉でいえば幽霊が見える。彼女自身はそう言っていた。時折、こうして絵に描いて私に見せてくる。本当に幽霊が見えているのか。そもそも幽霊なんているのか。私にその答えは分からない。全てが天莉の妄想なのかも知れない。人には見えないものが見える。

「女の子は傘をさしていました」

突然、天莉は口を開く。彼女はいつも唐突だ。

「なに、それ」

「物語の始まりには相応しい文じゃないかしら」

教室の中で私たちはひっそりと息を凝らして、誰にもばれないようにこんな会話をする。

「女の子は傘をさしていました。もし未揺が作家さんなら、このあとはどういう文章を繋げる？」

「女の子は傘をさしていました——」

外は土砂降りです。

頭をよぎったのはそんな文章。当たり障りのない、文章だ。でも。こんな答えを天莉は望んでいない。

——天莉に嫌われたくない。

彼女につまらない人間と思われたくないのだ。そういう気持ちで一緒に行動していると、段々と彼女の思考が読めるようになってきた。

私は答える。

「けれど、雨は降っていませんでした」

ほう、と小さく息を吐く天莉。瞳はすっかり閉じてしまって、何かを空想する猫のように。

「良いね」

一言。すごく——良い。天莉はそう続けた。

「天莉だったらどう繋げるの、次の文章」

興味本位で訊いてみる。これも彼女との会話では重要なことだ。天莉自身の気持ちも確かめること。大事。

可愛らしく眉を寄せて、思案顔になりながら天莉が答える。

「女の子は傘をさしていました。けれど、雨は降っていませんでした。わたしが傘を奪うと、女の子はすっかり溶けて消えてしまいました」

「終わっちゃった」

「うん」

天莉は物語を始めさせたり終わらせたりするのが好きだ。それも、彼女が幽霊が見えるからなのだろうか。不思議な感性を持っている。

物語は始まりがあれば必ず終わりがくる。それは人間だって同じこと。一度スタートを切ったら、あとはゴールまで走るしかない。途中で後ろを振り返ることはできるけど、走る方向は決まっている。足を止めることもできない。まるで坂道を転がるビー玉みたいに、私たちの命は加速度的に転がり落ちていく。

「この子、もういないの」

恐る恐る訊いてみる。天莉が頷くと、桃の匂いがした。

「チャイムが鳴ったら、いなくなっちゃった」

音に吃驚したというわけではないだろう。生徒が授業から解放されて、喧噪が広がりだしたから、幽霊は消えてしまったのか。

すっかり私は幽霊の話信じてしまっている。周りから私たちがどう見られているのか、分からない。

——でも、良い。なんだって良い。

私には天莉がいる。いてくれる。いや、天莉がいてくれるように、私は精一杯尽くす。それだけ。

「未瑠」

こうして、私の名前を呼んでくれる。それだけで、良かった。

千脇初はみんなからキウイと呼ばれている。名前が「ちわきうい」だから。彼女は面倒見の良いお母さんのような存在だった。私たちみたいな、あまり目立たない人種に対しても、気をつけて話しかけてくれる。それは去年から同じクラスだということもあるのかも知れないけれど。

「一つ目小僧がいるらしいの」

キウイの綺麗なアルトが響いた。まるで天莉がもう一人増えたかのような物言いに、私は少し吃驚する。いきなり何の話だこれは。一つ目小僧だなんて——。

「放課後にね、一人で校舎に残っていると何処からともなく、ずるっ、ずるっ、って音が聞こえてきて——」

天莉と一緒にいる所為で、幽霊とか妖怪だのといったものに多少の抵抗はなくなった私でも、キウイの話は不気味だった。

夕日が差し込む教室。

そこに一人でいると、一つ目小僧が教室のドアのところに立っている。こちらを見ている。濁

った一つの大きな瞳が、こちらを見ている。

天莉が絵を描いたわけでもないのに、私の頭にはくっきりと化け物のイメージが浮かんでいた。

「そ、そんなの、いるわけじゃない」

「怖いよ、未瑠」

不思議そうに天莉が尋ねてくる。

言い返せずに口をぱくぱくしている私に、

「でもね、まだ誰も見たことがないの」

だから、安心して。キウイはそう言ったけれど、背中を伝う気持ち悪い汗はすぐに止まってくれはしない。つうと、誰かに指先でなぞられるような不快感。

「一つ目小僧——ね」

天莉はなんだか思案顔で窓の外を見ている。昼休みの喧噪が廊下から聞こえる。教室の中は案外平和なもので、私たちみたいにお喋りをしている子ばかりだ。

「そう、一つ目小僧。私が気にしているのは、誰も見た人がいないってことなの」

キウイと天莉は一つ目小僧についてお話し中。

——はやく終わらないかな。

私の好きな話題じゃない。いつもみたいにドラマの話でもしていた方が、気は楽なのだ。

「誰も見たことがないのに、如何して一つ目小僧が出る、だなんて噂が立ったのかしら」

天莉の声に、なるほど、と思う。誰かが見た、そしてその姿形が、噂が伝わるにつれて尾ひれがついてしまう、なんてことなら分かるけれど、誰も見たことがないだなんて。そもそもどうやって——。

「どうやって噂になったんだろう」

「だよ、だよ、みゆちゃんも気になるかあ」

私の手を取って、上下にぶんぶん振り回すキウイ。笑みを浮かべた彼女に少しだけ恐怖を感じる。これは悪い予感しかしない。

「一緒に調べよう。一つ目小僧のこと！」

——最悪だ。

ふと天莉を見ると、彼女ははにかんで私に言う。

「面白そうだから、やってみようか」

その言葉に私は頷くしかない。天莉がそう言うなら。

放課後。夕日の橙色が教室を染め始めている。

ほとんどの生徒が部活に行き、誰もいない教室はすごく静かだ。今、その静謐の中にいるのは、私と天莉とキウイの三人。

「じゃあ、私が残るから、お二人さんは校舎の外に出ていてね」

夕焼けに染まったキウイの頬は、産毛が照らされて柔らかそうだ。

彼女の言葉に、天莉が訊き返す。

「校舎の外でなくてはいけないの」

もちろん、とキウイは言っ、

「こういうのはたいてい一人でいる時に“出る”ものなのよ」

どこか自慢そうだ。はやくこの場を離れたい私は、天莉の制服の袖をくいくい引っ張って、  
「行こう」

短くそう告げた。

怖いというのものもあるけれど、本当は違う。

キウイと話している天莉に嫉妬していたのだ——私は。

——本当に、醜いなあ、私って。

頷いた天莉の黒い髪の毛が揺れる。傾いた太陽の光の中で、踊った。綺麗だった。

二人で歩く廊下。窓の外から、野球部の声が風に乗ってやってくる。

「未揺は、出ると思うの」

天莉の声が響く。

「一つ目小僧」

「——ああ」

納得のいった私は首を横に振る。一つ目小僧なんているわけない。でも、天莉は——。

天莉はあの時、面白そうだから、と言ったのだ。だから私も、面白そうだ、って思った。思うように努めた。

「天莉はいると思うの」

たまらず訊き返す。天莉の真っ黒な髪の毛が良い匂いと共に揺れる。川べりに生えたススキの影が、風に舞うように。

昇降口にも生徒の姿はなかった。しんと静まりかえっている。

靴を履き終えた天莉は、

「見える人にとってはいるし、見えない人にとってはいないよ」

「それって」

——どういうこと。

「未揺は流れ星を見たことが、あるかしら」

そう言うと天莉は窓から空を見上げた。

「あるけど——」

それが如何したと言うのだろう。

小学生の頃、一度だけ見たことがある。なかなか寝つけなくて夜空をぼーっと見ていたら偶然

。「流れ星はね、夜だけに流れているんじゃないんだって。今も、こうして、空が明るい時でも流れ星は地球に落ちてきている」

微かに藍色に染まりつつある空に、飛行機が飛んでいるのが見える。

「でもね、空が明るい流れ星は見えないんだって。それって、流れ星がもともとないってことでも一緒じゃないかしら。見えない人にとっては、その星はないと同然なの。幽霊とかそういったモノも、一緒なんだよ」

きっと。

天莉はそう言い切った。

天莉の声を聴くのが好きだった。

天莉の髪が揺れるのを見るのが、好きだった。

私はいつしか、天莉に恋をしていた。天莉のようになりたかった。

幽霊のようなものが、人には見える筈のないものが、見えてしまう天莉。私もそうなりたい、と無意識に願っていたのだろう。

共有したかっただけなのだ。天莉と同じ景色を見たかっただけだ。そうすれば、彼女に気に入ってもらえるような気がして。

——天莉。

隣を歩く天莉の頬が夕陽に照らされている。

——綺麗。

髪の間隙から覗く真珠のような耳が、可愛らしい。

キウイがなかなか戻ってこないで、天莉と一緒に校舎の中に入った。奇妙なほど静まり返った校舎内は、少しだけ不気味だった。人気のない廊下が、こんなにも異様に見えるとは。

けれど、天莉がいれば——怖くはない。彼女の細い指を手にとりたい衝動に駆られる。怖がる素振りを見せれば、自然だろうか。

そんなことを考えていると、天莉の足が止まったことに気がつくのに時間がかかった。

——如何したのだろう。

一瞬遅れて、彼女の顔に視線を移すと、

「千脇さん——」

天莉はキウイの名を呟いた。彼女の視線の先には——キウイが倒れていた。床の上にだらしなく伸びた手足が、妙に生々しい。

廊下に倒れているキウイの隣には、一人の少女が佇んでいる。

月のない夜空みたいに真っ黒な髪は、床に届くほどの長さだ。

その少女が私たちに気づいた。こちらに視線を向ける。

黒髪の少女は、片目だった。左目は長い髪に隠れてしまっていて、ここからでは窺うことはできない。

もしかして、これが――。

「一つ、目――」

その言葉は口の中で、淡く消えた。

天莉がキウイのもとへと、一歩踏み出す。瞬間、背中に悪寒が走った。ソイツはまずい。理屈は分からないけれど、今、その一つ目の少女に近づくことは危険だ。

「あ、天莉！」

思わず叫んでいた。

「何よ、未揺。千脇さん、倒れているし、何かあったのかも知れないわ」

「何って、こっちの台詞だよ、天莉！ キウイの、横の子――見えないの」

「横の子？」

首を傾げて、目を眇める天莉。しかし、すぐに怪訝な表情で私を見た。冗談を言っていると思われたのか。

――天莉には見えていないんだ。

「キウイの横に――いるの。一つ目の、女の子――」

深呼吸するみたいに、一言、一言、しっかりと発音する。天莉は驚いて、

「何か、見えるの」

「うん――」

一つ目少女はゆったりとした動作でこっちを見ている。細く長い指に血がついているのが見えた。まだ新しい色だけれど、彼女が怪我しているとは思えなかった。

あの血は、もしかすると。

「血――」

天莉の唇が震える。一つ目少女は見えなくても、キウイの血は見えるのだろう。きっと血が宙に浮いた感じに。

キウイは生きているのか。

得体の知れない恐怖が襲ってくる。

――怖い。

目の前の一つ目少女がいったいどういう存在なのか。

――分からない。

「に、逃げよう、天莉！」

「でも、千脇さんが――」

なおもキウイのもとへ行こうとする天莉の腕を引っ張り、今来た廊下を走り出す。その時だった。一つ目少女の姿が消えた。

いや――消えたように見えたのだ。実際には目にも止まらぬ速さで、私の目の前に現れたのだ

った。

息が止まるかと思った。息がかかるような至近距離に、美しい黒髪の少女がいたのだ。

右目は呑みこまれそうなほど深い黒をたたえた瞳。左目は髪の毛に埋もれていて、見ることは叶わない。細い髪の毛一本一本が、嵐の夜みたいな闇を内包している。

ずっと、手が動くのが分かった。

そして、キウイの血で濡れた右手が、消えた――。

ように、見えた。

気がつくのと、私と天莉は宙に舞っていた。彼女の右手の一突きで、二人の体はいとも簡単に吹き飛んでしまったのだ。

派手に床に背中をぶつけて、肺の空気を全て吐き出してしまう。呻き声すら出せなかった。今までに受けたこともないような痛みが、全身に走った。

追撃は、こない。

なんとか息ができるようになって、一つ目少女を見ると、彼女は薄く笑っていた。

彼女の目的は何なのか。

そもそも、何者なのか。

「今のも、その、一つ目の子が――やったの？」

天莉が後頭部を押さえ、渋面を作って私を見る。

「そう――だと思う。早すぎて見えなかったけど」

一つ目少女は、私たちのことを狙っている。それだけは分かる。

――でも。

彼女の目的が分からない。

咄嗟に天莉の手を取って、駆け出す。抗議の声を上げる天莉に、構ってなどいられない。

「今は逃げるのが先！」

一つ目少女が見えるのは私だけなのだ。

だったら、私が天莉を逃がすのが、私の役目だ。

――不思議。

天莉はずっと私の憧れだった。私が彼女の背中を追っているんだと、そう思っていた。

――でも、違うんだ。

幽霊に見える天莉が、普通と違う天莉が――好きだったのに。

「天莉」

いきなり足を止める。天莉は息が切れている。一つ目少女の攻撃が、じわじわと効いてきているのかも知れない。

「ど、如何したの――」

汗の浮かんだ頬は、赤く上気している。桃の匂いのする髪が、首に貼りついている。

天莉は――。

「――違う」

「え」

「こんなの——違う」

震える私の声。それを打ち消すように、硬い足音が廊下に響いた。

一つ目少女が、すぐ後ろにまで迫っていた。逃げても、無駄なのだ。

——もう、如何になったって良い。

私はいつしか、自分の理想を天莉に重ねてしまっていたのだ。『理想の天莉』を見ていただけなのだ。

「天莉——ごめんね」

それでも、彼女のことを嫌いになったわけじゃない。

それでも、好きだから——。

だから。

「な、何を——しているの」

私は天莉と一つ目少女との間に立った。両手を広げて、天莉を護る。それが私の役目なのだから。

一つ目少女は、ひとつ息を吐いた。

途端に激痛が左目に走った。衝撃で後ろに吹き飛ばされた。

天莉の叫び声が聞こえる。

——ごめん、天莉。

「未揺！」

天莉に抱き起された。けれど、うまく彼女の顔が見えなかった。

——如何したんだろう。

「未揺、目が——」

さっと左目を撫でると、そこにはぼっかりと穴が開いていて、止めどなく血が流れ落ちてきた。遅れて、津波のように痛みが押し寄せてきた。

「大丈夫、だよ、天莉。だから——」

心配しないで。

「そんな、大丈夫なわけ、ないじゃない——未揺の、目が——」

いつもは気丈な天莉の両目からは、大粒の涙が零れ落ちた。不思議なものを見ることのできる目から溢れる涙は、普通の女の子のものだった。

天莉の真珠の欠片みたいな涙が、私の頬に伝って、血に溶けていく。

「まだ、だよ」

激痛で倒れてしまいそうになりながら、一つ目少女を睨み返す。

彼女は私の血で濡れそぼった右手で、小さな球体を摘まんでいる。それは私の眼球だった。もしかすると一つ目少女は——髪の毛で隠された左目に合うような、眼球を求めていたのかも知れない。

一つ目少女は、うっすらと血にまみれた私の目を頭上に掲げた。ふっと、笑ったように見えた。

次の瞬間、一つ目少女の姿は消えてしまった。綺麗に咲いた花が散るみたいに、あっけなく。

ほっとすると、どっと疲れが出てきた。頭がくらくらする。

さっきから私の名前を呼ぶ天莉に、弱々しく微笑みかける。

「大丈夫——あいつ、いなくなっちゃったから」

「そんなこと心配してない！ 未揺、大丈夫なの、ねえ！」

片目になった今なら、分かる。

天莉は、いたって普通の女の子。

ちょっと変わったところもあるけれど。私と変わらない女の子なんだ。

「今まで、ごめんね」

口をついて出たのは、謝罪だった。

勝手に天莉をすごい人だと思い込んで。

勝手に天莉の姿や声に憧れて。

勝手に——。

好きになった。

「だ、誰か呼んでくるから、すぐに呼んでくるから！」

そう言うと、天莉は走り出した。この時間ならまだ先生たちだって残っているだろう。

静まり返った廊下に、力なく横になる。ひんやりとした床が、頬に当たって気持ちが良い。

ふと何かの気配を感じて、瞑っていた右目を開けると、驚くべき光景が広がっていた。

痛みで頭がおかしくなってしまったのかと思った。

私の周囲には、大勢の人間がいた。ある人はスーツ姿で忙しく通り過ぎていき、ある人は椅子に座るような姿勢で本を読むような仕草をしている。どの人もうつすら透けていて、まるで——

。

「幽霊？」

ひとりごちると、左目がずきんと痛んだ。思わず呻く。

彼ら——幽霊は、私のことに気がついていないようだ。寧ろ、彼ら自身が全て独立した動きをしている。まるで互いに見えていないような、そんな気さえする。

ふと、悟る。私が見ているのは、他の世界なのではないか。世界というのはたくさんあって、普段は目に見えなくても、きちんと私たちの世界のすぐ隣にあるのではないか。

その様々な世界が、今、片目になってしまった私には見えているのかも知れない。

耳に振動が伝わってきて、天莉が戻ってきたのを知る。

「未揺！」

天莉のよく通る声。私の好きな声が、廊下に響く。

私が見てきた景色とは、いったい何なのだろうか。

天莉が見てきた世界とは、いったい何なのだろう。

——怖い。

自分の見ている世界と、自分が好きになった人の見ている世界が、重ならないことがたまらなく——怖いのだ。

私は天莉のことが好き。だから、私は天莉と同じ世界を見たかった。幽霊を見たかった。その

願いが叶ったのか、一つ目少女を見ることができた。でも、肝心の天莉が一つ目少女を見ることはできなかった。そして今、私は他の世界を見ることができてしまっている。

——厭だ。

違うということが、私をどうしようもなく不安にさせる。

天莉の手が私の頭を撫でた。

「未揺、もう少しだけ頑張っ。すぐに救急車来るから」

彼女の顔を見るのが怖かった。残された右目で、世界を見るのが、本当に怖かった。

暗く閉ざされた瞼の裏側に、私の好きだった、天莉の笑顔が浮かんで、やがて消えた。